

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10

本郷駒川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

051 NOVEMBER 20.
1999

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：「地場産業と都市環境～京都」

1. 地場産業地域のこれから—京都.....1
2. 生活としての地域産業.....3
3. 西陣の町屋—to be or not to be.....5
4. ネットワーク西陣にみる瓢箪から駒.....7
5. グローバル時代の地域産業@京都.....10
6. 京都・伏見のまちづくり.....11
7. 陶磁器の街・五条坂の20世紀.....13
8. アスペン・京都・ウィーン／パリ.....15

9. 姉小路界隈に見るまちの豊かな循環.....17
10. 「目利き」の造る京都の町並.....19
11. 京都の町並みと感性産業.....21
12. 「新光悦村」構想について.....22
13. まつりという景観.....24
- 第9期全国ブロック幹事会報告.....25
- 委員会活動報告.....26
- ブロック例会レポート.....26
- 事務局より.....28

特集：地場産業と都市環境～京都

特集

1

地場産業地域のこ れから—京都

田端 修

TABATA OSAMU

大阪芸術大学

1 まちコンビナートとしての地場産業

地場産業の定義として確定的なものはないよう見受けれるが、ここではさしづめ、つぎのような捉え方をしておきたい。すなわち「地域と一体となって特産品を製造する産業。市場は広域。当該地域での生産・生活の根幹をなしており、地域居住者の多くが参画する産業」である。

このような地場産業地域の特性を都市環境デザインの視点からみると、「職住近接または職住一致のまち」、「家族産業的スケール」、そして「特産品と関連産業がネットワークするまち」などのキーワードが抽出される。京都の地場産業地域のなかでも最大級の西陣地区—高級織物産地としての一をとりあげて説明してみよう。

西陣織産地・西陣は、和装織物産業の押しも押されぬセンターとして生き続けてきた。伝統的な町家や長屋の奥まった空間においていた織機に家族ぐるみで向き合うといった職住の基本ユニットが集まって地場産業の町が成立してきたのである。西陣では用地を拡大できない成長企業が北山山地のふもとなどに近代的な工場を設置して脱出することもあったが、それでも西陣本体は相変わらずの勢いを継続し続けてきた。

このような市街地であるから、高密度の居住地として必要な生活施設—学校・商店街・諸商店・娯楽施設その他—が整っていることは当然であるが、また織機の修繕とか運送業などの関連職種も育ち、原料（生糸の仕入れ）やでき上がった製品の買い付け・卸・販売などを行う流通業種からデザイナーに至る役割分担が行われ、また、図-1にみるように、何よりも西陣織の工程そのものが高度の分業体制、多種類の仕事のネットワークによって成立するものであつ

た。そして、これらの仕事に携わる商・職人などの大半が町家・長屋の住人であったわけである。

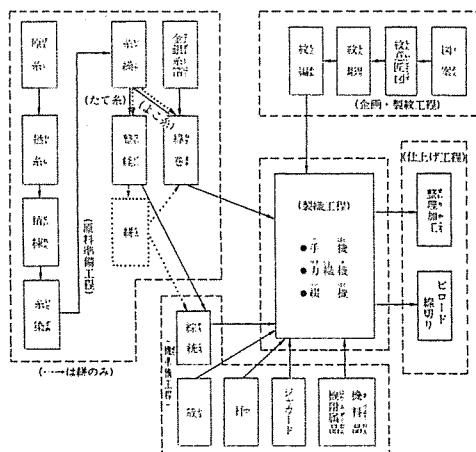


図-1

まるで一種のコンビナートのように、このまちでは職住融合が実現し、互いに分担し合いながら、さいごにはきらびやかな完成品を送り出すという営為をくり返しかけたのである。西陣ではまち全体がつながり合って生産基地を構成するが、空間的には町家を中心としたローテク傾斜型のコンビナートである。油っけなしの芳しい匂いを発散する、ヒューマンサイズの「まちコンビナート」である。

西陣を歩くとまるで大きな寺町に迷い込んだかと思うほど、つぎつぎに社寺地に出会うこともつけ加えたい。太閤秀吉による京都大改造などがもたらした環境デザイン的ストックである。これらもまた、地域に複雑さと豊かさに満ちた表情をつくり出し増幅する役割を果たしている。

2 地場産業の集まりとしての京都

京都という都市はこのような自立的なまち、地場産業のまちが集まって構成されて

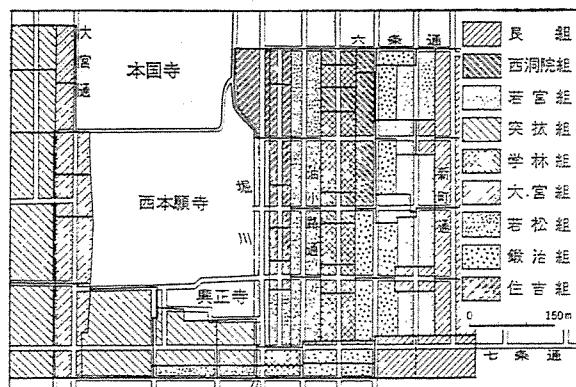


図-2

いる。そのうちの最大のエリアをカバーして広がるのが西陣であるといえよう。

これに次いでよく知られ、なお命脈を保っている地場産業のまちとして、京染・友禅職の広がる中京中西部地区、京陶磁器の主産地としての清水・泉涌寺一帯、南部地域の醸造産業地・伏見などがある。

本願寺寺内町(図-2)や、祇園などの花街もこれに分類されてよいように思う。

「特産品を生産」という製造業的な限定を外して、「広域的市場を基盤とするサービス産業」をも加えると、これらは京都ならではの重要な「地場産業のまち」である。同様に「映画のまち・太秦」も往時の勢いはないが撮影所等と一体化したまちがあつたし、東海道の起終点である三条大橋の西寄りには「旅館街」が発達しており、最近は和風デザインの中高層旅館などへの更新がすすみ、各種の商業・サービス業も拡充しつつある。このところ話題の「俵屋」旅館もこの範囲内にある。周辺の下宿街・飲食店群などを含めた「大学町」も京都大学界隈をはじめいくつも見出される。大学を中心とした「地場産業のまち」である。

やや小ぶりだが数多くの「地場産業のまち」は、まだまだ京都のまちのあちこちから掘り起こせるであろう。近世京都は公家を中心とする儀典都市である以上に、トップの工業都市であったという歴史を思い起こせば、これは当然のことである。

「地場産業のまち」を総覧すれば、京都では、それらのボーダーはおおむねあいまいであり、互いに入り混じりながら共存していることが知られる。しかもそれらの多くは、低層高密度型の都市環境として広がっていることから、概括的にいえば産業や仕事の生み出すアクティビティはごくゆるやかでありながら、絶え間なく人や物の往来を誘発するといったパターンを示す。

これを、まち的な賑わいと呼んでよい。京都の旧市街地地域をうろうろする時に感じる心地よさは、どこにいてもこのような仕事の存在が認めうるという感覚に連続し

ているのではないだろうか。

しかし現今、多くの地場産業が衰退傾向を指摘されていることも、隠しようがない事実である。例えば、かつては西陣地域にはひとつの独立都市のように、中心部に大規模繁華街を抱えていたが、いまは見る影もない。着物を着るという生活がわれわれの日常からどんどん消失している。そのほかの「地場産業」にしても似たり寄ったりの事情におかれている。大学さえ郊外地に移転してしまい、まわりのまちまちをグンと寂しくさせてしまう状況だ。

3 地場産業を総合環境装置として見直す

在来のままに産出物の出荷量を拡大するための努力・工夫などの、産業的な対応にはどうやら限度があるようと思える。そのための諸施策は継続させるとしても、さらに別途の視点を加えていく必要があろう。

以下にとりあげるような、地場産業型の都市環境がもつ地域社会的な意味合いを見なおす作業や都市景観の向上への取り組み事例など、地場産業の培ってきた多様なネットワークやまちの環境デザインの役割を総体的な視座から捉え直す視点は、これからまちづくりを構想する上で有用性が高いのではないか。

それによって在来からの職住融合型市街地を住みやすさに満ちた場所として位置づけしなおす、新しい都市評価の軸を照らし出すことができるかも知れない。地場産業のつくってきた都市環境のストックと一定の産業ネットワークを活用して「先進的な芸術都市」などをめざす事例はその具体的な展開策なのかも知れない。

この時代のこの状況は、都市の地場産業がもつ広汎な意味を描き出し、これを住みよさに満ちた総合環境づくりの主装置として位置づけし直す絶好のチャンスであると考えうる。京都はそのための格好の舞台である。

生活としての地域産業

河合 满朗

KAWAI MITSUO

株式会社・ディー・アイ

1 那覇にて 1999 年

沖縄県の若い職員は、県庁近くの居酒屋で泡盛をぐいぐい呑みながらつぶやいた。「いろいろな生活指標でみると、沖縄はだいたいいろんな点で最下位とか下の方にくるんですよ。若者の失業率なんか信じられないくらいだし、県民 1 人あたりの所得も低いしね。でも沖縄はジイさんバアさんが多くて、日本一長寿の県なんですよね。それでいて子供なんて本土じゃ一人っ子とかばっかりだけれど、沖縄じゃ 3 人や 4 人なんてふつうですもんね。だから高齢化率は意外と低いんですよ。それに 21 世紀になつても、沖縄じや子供がどんどん生まれて人口が増えつづけるんです。本土は減っていくのにね。それで若い人の職はなくて失業率が高くなるんだよね。でも人間なんとか生きていけるんですよ。」

そこからの話は、「人の豊かさや幸せ度を計る尺度はあるのか」とつづき、蒸し暑い那覇の夜はふけていったのである。

2 わらじ医者

いまから 20 年ほど前、堀川病院の早川一光先生のご自宅で話をきいていた。テーマは高齢者の医療・介護だった。当時から先生は、西陣地域で高齢者の在宅看護・介護プロジェクトを進めておられた。そしてそのための訪問医療・看護を進めておられ、自分のことを「わらじ医者」と呼んでおられた。先生は、お年寄りを病院に入れてはいけない、西陣のお年寄りは機の音を聞きながら畳の上で人生をしめくくるのが「幸せ」なんだと信じておられた。

私は、しかしそのお年寄りを介護する家族、とくに女性に大きな負担がかかってしまうのではないかと、かた通りに疑義をはさんだ。すると先生は、あなたは西陣という街、西陣で連綿と続いてきた生活というものを知っていますかといわれた。はつきりいって私は、西陣は古いコミュニティで西陣織という伝統的な産業で成り立っているところというくらしか知らなかつた。私のこうした知識とも呼べない知識に対して先生は、ではいちど私が西陣に訪問看護に行く時についてきなさいといわれた。

ある日、機の音のする西陣の街を、先生について回った。西陣の袋路やうなぎの寝床の町家の空間、そこに暮らす人々の姿、家族に看護されるお年寄りの姿をはじめてこの目で見ることができた。それが西陣との初めての出会いであった。

3 「100 年後に消滅します」

その 2 年後、京都の産業振興を考える機会があった。当時の西陣機業の抱える問題点はいろいろあり、基本的に和装需要の低

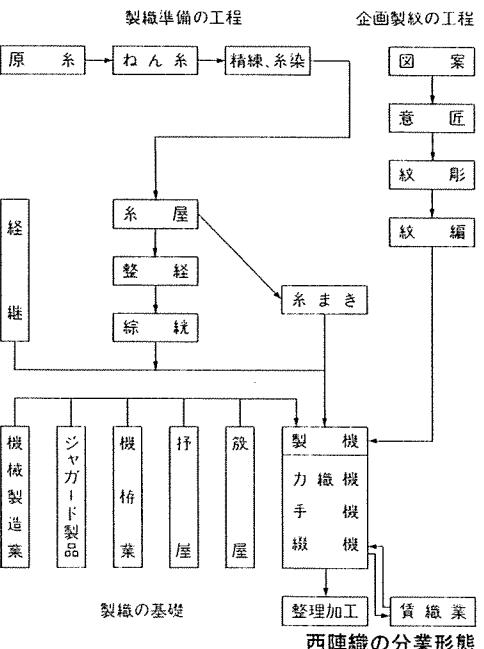
迷、原料費の高騰、外国産品との競合、従業者の高齢化と後継者難など、ほとんど満身創痍に近い状況であった。しかも西陣機業は京都の工業生産の 10 数パーセントを占めていた（工業出荷額換算）。西陣機業の不振が、京都産業の足を引張るという状況にあったのである。当時、この西陣機業の将来を回帰分析でシミュレーションしたスタッフは、「西陣は 100 年後には消滅します」と報告した。

この調査における提言は、生産体制の近代化を克服して、「高級化」という名の下での、売れる製品への利益転化をやめ、適正な高級化と現代のライフスタイルに合った製品開発をすべきであるというのが骨子であった。

産業振興という観点から西陣機業と西陣という地域をみて、それに関するデータを整理・分析して、産業振興の専門家と議論しながら作業をすすめていくと、このこたえしか出ない。しかしこの調査や提言をしながら、先に見た西陣の暮らしの様子がずっと頭から離れなかつた。

4 産業振興の視点からは見えてこないもの

西陣機業の非効率の一例として、その複雑多岐な分業形態がよくあげられる。



西陣機業を分析するときに、まずぶち当たるのがこの分業形態表である。だいたい漢字がよめない。当時どんな作業なのか想像もつかなかつた。

しかしひらたく言うと、60 歳や 70 歳のお年寄りが、織機を動かしていたりして、もし年をとってそれができなくなったら、糸くずを除いたり、糸の乱れを直したりいろいろな手作業をする。そうしたことがこの表の中には込められている。それは産業振興の視野からはけつして見えてはこない。

()内1975年対比(%)												
事務・販売	間接工	カ 縫 機 ウ ィ ー バ ー	手 縫 機 ウ ィ ー バ ー	計	合	計	構成比					
(男) (女)	男 (女)	(男) (女)	(男) (女)	(男) (女)	(男) (女)	(男) (女)	(%)					
29歳まで	1,056	974	1,113	180	544	90	478	1,497 2,128				
30~49歳	1,604	841	364	235	1,656	3,096	561	1,515	4,365	5,650	10,075 (89.2)	50.3
50~59歳	263	345	96	257	743	1,174	466	660	1,588	2,436	4,024 (106.5)	20.1
60歳以上	220	170	73	287	256	316	634	302	1,222	1,075	2,297 (92.1)	11.5
計	3,343	2,333	704	911	2,874	5,130	1,771	2,955	8,692	11,323	20,021 (89.1)	100.0

西陣機業の年齢別従業者数

ちょっとしたしかし神経を使う作業は「間接工」とくくられるが、そこにはしっかりオバアさんが活躍している。手織りをする人は「手機ウィーバー」でくくられるが、そこにはしっかりオジイさんが活躍している。本当はこの表からだけでもそんなことが読み取れる。産業振興の視点からは、それを「従業者の高齢化」とか後継者難と分析しなければならない。

しかし生活の実態というものは、あるいは地域の生活の構造というものは、多くのものがつながりあっていて、じつは産業振興の視点などからみるよりははるかに複雑で豊かである。

当時は市電・市バスの無料バスを使って、オジイさんオバアさんの行動範囲はそれなりに広かった。軽い作業の合間に、お寺にお参りしたり、ちょっとした買物にでかけていた。機の音を聞きながら路地で遊んで育って、一人前になり、齡を重ねながら、西陣織の中心的担い手から、その補助的な手にまわっていくという時間の流れがそこにはあった。やがてそれもできなくなつて、家族の介添えが必要になる。早川先生も来るようになるであろう。

その時、職住近接というよりは職住一致

という生活スタイルのなかで、家族は作業の手を休め、お年寄りの面倒を見る。家族だけではなく、向う三軒両隣で助け合う。

西陣でもっとも痛手だったのは、産業が衰退すると同時に、こうした相互扶助的なシステムが壊れてしまったことであった。高付加価値の生業をもちながら、しかも都市で集つて住まうかたち、その両方がくずれていったのである。

5 西陣はほんとうに「前近代的」なのだろうか？

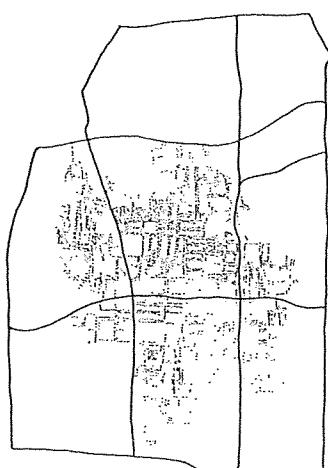
もしいま、京都工業の10%のシェアを占める産業を創出しようとしたら、それははたいへんことである。もしいま、60歳以上のひとのための2300人分の雇用を創出しようとしたら、それははたいへんなことである。

そしてさらに考える。この2300人の背後には、家族というところまで広げてもみれば、いろいろな介護を要するお年寄りがたくさんいるであろう。定年制をもたない産業社会はある意味でとても健全である。もし西陣に定年制というものがあったなら、もっともっと多くの要介護の高齢者を生み出していたことだろう。

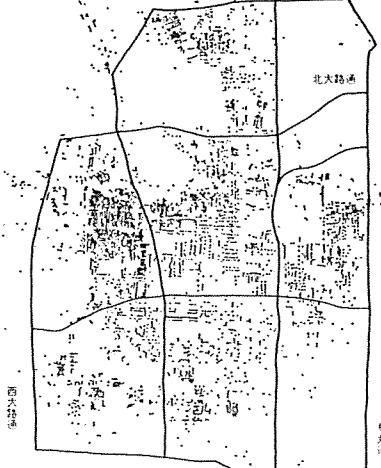
これは簡単な計算である。ある70歳のお年寄りが寝たきりになった場合と、元気でしかも生産の現場になおとどまっていることの社会的コストの差を考えてみればいい。それは生産の現場にいないお年寄りの「元気と寝たきり」の差よりもはるかに大きい。

生産と消費、労働と余暇、住居と工場、自然と都市、生活と福祉、家庭と学校、あ

機業の分布



1940年



1980年

「西陣」の拡散

らゆるものを二つ以上に分断し、それによって生身の人間をとその生活、生活の現場である地域社会を裂いた近代という特殊な時代から「前近代的」といわれる西陣。そのうめきは、那覇の居酒屋の喰きとおなじところにあるような気がする。

西陣は、おそらく近代にとっては「お荷物」であっただろう。しかし、それを相対

化する視野からは大きな「資源」である。御池通りをなんとかするよりは、産業と生活の場として西陣を、「再生」なんかではなくまちづくりの中心テーマにしていくことが京都策である。

そして形と素材だけをいじくりまわす癖のついてしまった環境デザイナーは、そこでは出番はない。

1 西陣の魅力

西陣地区は長い歴史を持つ特色のある織維産業の町としてだけでなく、そこには織物のように様々な機能が複雑に綾をなしていることが私の興味を惹き付けて止まない。生活の場、働く場所、買い物の場所、そして楽しみの場所が、西陣の地域社会には混在している。

とくに生活と働くことが深く結びついていることが、町家と呼ばれる特色のある都市住宅を創り出した。町家街区において、個人と公共の領域、両者の中間的な領域の3つの領域はたがいに繊細に織りめぐらされていて、個人の都市活動の自由と地域社会の調整の機能を両立させている。

私は、町家街区の特色のある空間構成と伝統的なコミュニティのそれぞれの魅力と、両者の深いつながりの魅力にひかれて、自分の研究対象として西陣を選んだ。そして、いまでもこの地域に特長のある歴史的街区構成のパターンが残っていないか、また西陣の現在の街区のレイアウトとコミュニティに対する居住者の意識はどのようなものであるのか、の2点について調査した。もし、西陣を成り立たせている「西陣らしさ」というものがそこにあるとすれば、それは現代の都市における地区計画・設計に十分に応用できるものではないかと考えたからである。

2 西陣での調査

そこで、西陣地区の4街区で、(回)住宅地図調査、(用)アンケート調査、(火)住民へのヒアリング調査の、3種類の調査を実施した。

住宅地図調査で、1956年から1996年までの40年間の地区的変遷を調べたところ、38%の家族のみが40年間、同じ街区に居住し続けていた。また、全体の51%が町家であるが、そのうちの33%のみが伝統的な姿を残している。残りの29%は新しく建て替えられている。しかし、そのうちの11%は町家型の建築である。

これらのデータから、西陣のコミュニティは今後もおよそ40%の住み続ける人と、60%の新規居住者で構成されると思われる。西陣は長期居住者と新規居住者の2つのタ

イプの居住者で構成されるコミュニティである。

また建物に関して、以下のような2つの異なる問題点に直面していることが指摘される。

- (1) 現存する建築物の現代への適用と再生
- (2) 新しい建物を造る方法

西陣という都市空間の個性を保全するためには、これら2つの問題点に対する解決方法を見いだす必要がある。もし伝統的な住宅を維持し、その一方で引き続き地域の個性を潰すことなく引き出すようなかたちで新しい建築物を建てることができれば、西陣は歴史的な文化を保ちながら、同時に歴史都市を現代的に再生していく良いモデルとなる。

アンケート調査とヒアリング調査では、町家と町家街区のデザインの質に対する住民の意識を調査した。その結果は次のようなものであった。

(1) 住民は西陣地域の個性には合わない、京都的な精神を欠いた「センスのない」高層建築に悩まされている。そして、町並みに不満を抱いている。いくつかの街区で高層建築に対する批判的な運動が行われている。

(2) 住民にとって重要な町家の問題は、太陽の光が少ないと、冬寒くて夏は暑いこと、プライバシーの欠如、維持経費が高いことである。逆に京都らしい建築スタイルつまり家と庭の配置によって風が吹き抜け、過剰なディテールのない合理的な平面計画、大黒柱、吹き抜け天井、などを高く評価している。

したがって、どのような住宅に住みたいのかを住民に聞くと、溢れる太陽の光、庭、南向きの家、風のながれ、安全性などが第一にあげられる。住民にとって重要なのは居住環境であって、美的な条件は二次的な要求となっていることがわかる。

こうした住民の意識・意向を尊重するならば、西陣における新しい建築物は必ずしもこの地域の伝統的な建築スタイルを再現する必要がないといえる。住民にとってた

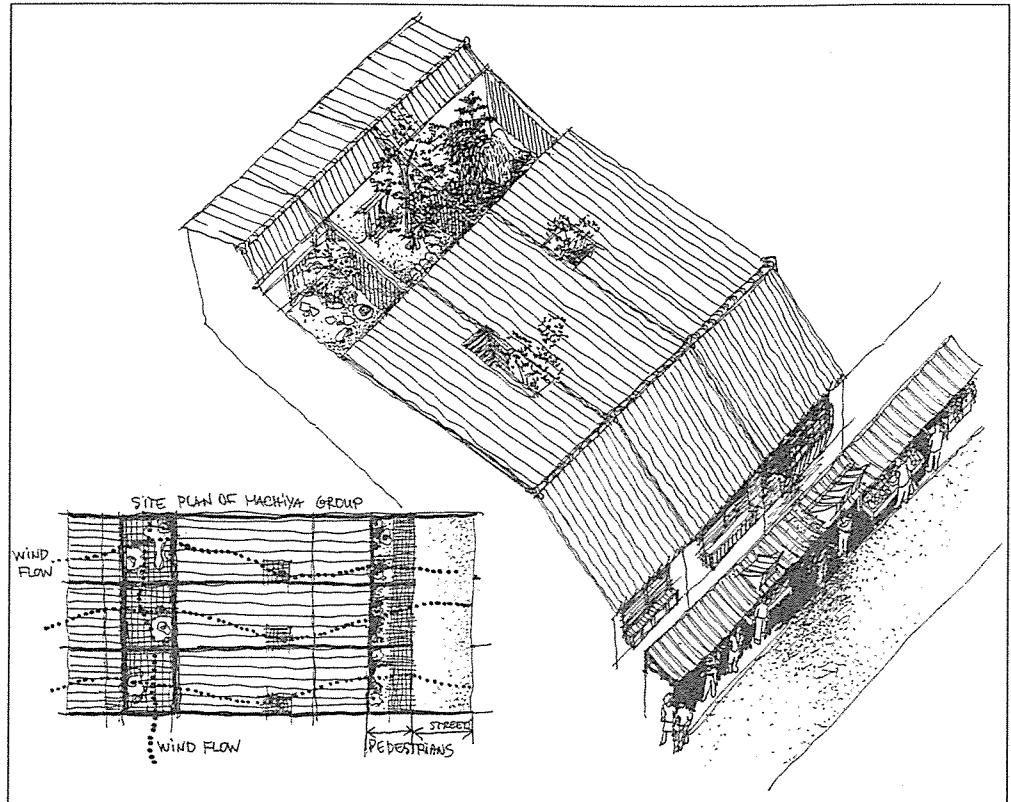
特集 3～西陣・1

西陣の町家—To be or not to be

ミレーナ・メタルコワ・マルコワ

MILENA METALKOVA
MARKOVA

京都工芸繊維大学都市環境
デザイン研究室博士課程



西陣京町家の特徴（西陣・糸屋町）

いせつなことは、環境にやさしい快適な住居と、コミュニティが保持している伝統的なよき精神の2つなのである。

3 住民の意識と西陣の町家の再生

京町家の価値は、住民の意識・価値観からみれば次のようにまとめられる。

(1) 風通しと防火上の利点があるので、外見上は区切られているが、空間的にはつながりのある隣家同士の庭の構成がよい。

(2) 隣接する住居間で、風通しと湿気対策上、相互の庭が空間的に一つにつなげられている構成がよい。

(3) 個々の住宅の前面のファサードがつながり、アーケードのような連続空間を形成することで歩行者を雨や日光から守る働きをするのがよい。

(4) 住宅の前面の公共道路に花を飾ることは、町に潤いを与えている。

こうした住民の意向を具体的にモデル化してみたのがこのイメージスケッチである。

4 西陣の未来への提案：その1

西陣の将来を考えるとき、そこに住みつづける40%の住民と、新しく地区に入ってくる60%の住民との間の交流が重要である。

西陣は旅行者などのような短期滞在者にも、学生、芸術家、外国人、そして一般の人々などの長期的な滞在者にも魅力的である。西陣には、そうした人々を魅了するいくつかの資源がある。とくに町家はそうした資源のなかでもっとも重要なものである。町家に新しい用途と機能、現代生活への適

合性を挿入することが必要である。

(1) 京都に来る旅行者に対しての利便施設として、現存する西陣の町家のストックを利用できる。これは、町家の持ち主と旅行者の交流をもたらす。

(2) 西陣地区の職人の技と価値を次世代が受け継ぐために、技術習得の場や夜間学校を設置する。この施設は、西陣の中で活力のある学校の周辺に設けるのがよい。このことで若者の世代と職人ととの間を繋ぐことができる。

また、こうした活動は、京町家の自助的な再生に有効である。再生の現場で職人、大工、移住してきた人の自立的で相互扶助的な共同作業をすることで、町家再生コストを抑えることが可能になる。

(3) 住宅としての京町家の再生に関わる問題として大きいのは、大学の建築系の教育課程に町家への取組みが含まれていないことである。また、建築コンペなどでもなかなか解決の糸口が見えていない。学生、大工、建築家が協力する具体的な取組みによって、現代に適用可能な新しい町家のスタイルが開発できる。

また、京町家の新しいデザインは、大学での研究成果をもとに積水ハウスなどの大手住宅メーカーによって現実化すればよい。それは西陣のニューカマーのための、“京都スタイルの新町家”となるだろう。

(4) 京町家が建築群としてあることの建築的な価値とその原理は、新しい京都の都市計画に反映させることができる。

5 西陣の未来への提案：その2

ここで、スコットランドのアヤシャレ織物(Ayrshire textiles)の例をあげておく。アヤシャレ織りは1700年に小さな村の家内産業として生まれたが、今日では年間3億米ドルの生産高になっている。売り上げの40%はヨーロッパ、北アメリカ、日本、アジア地域に輸出されている。この繊維産業が成功した理由はたいへんシンプルである。つまり職人たちの技術をベースにして、革新的な事業が生み出され、技術的革新が行われたということである。そして彼らの

技術は伝統的な繊維産業の分野をこえて、それ以外の分野でも製品を産み出しており、その領域は、プラスティック産業のファイバー繊維、保健医療分野での歯ブラシの毛、漁網などにも及んでいる。

西陣の産業の未来は、新しい製品・素材、新しい市場、そして世界に広がる新しいネットワークによって拓かれる。また西陣織は、新しいファッション性の高いデザイン製品の素材に用いることでその市場を拡大することが可能ではないかと思われる。

特集 4～西陣・2

ネットワーク西陣 にみる瓢箪から駒

佐野 充照
SANO JUSHO

大本山妙蓮寺塔頭円常院住職
西陣活性化実顕地をつくる会
(ネットワーク西陣)代表
町家俱楽部ネットワーク事務局

そもそもネットワーク西陣は略称で、正式には西陣活性化実顕地をつくる会といいます。

活性化という文字を使用しているために、活性化を目的とした団体であると誤解されますが、そういう目的といいますか、方向性をもつものではありません。また、なんらイデオロギーを持ったものでもありません。

私たちのドラマは、95年の夏に私の友人でもあり、現在のネットワーク西陣や後に述べる町家俱楽部の中心的存在になる小針剛が西陣に引っ越ししてきたことに始まります。

元々アンティックが好きで、土人形や台所の神様である布袋尊を蒐集していた私のもとに、鐘き尊という京町家の守護神が舞い込んで来ました。その時に、町家そのものが壊されることによって、行き場を失った鐘き尊が奉納されるという構図に気付いた私は、京町家に残る鐘き尊の調査を思い立ちました。

そこで以外な事が判明したのです。もちろん、鐘き尊が上京区において、約九百体残っており、五十軒に一件ぐらいの間隔で見られるというのも興味深い結果でしたが、それよりも、なんと空き家が大変多い事だったのです。その中には、朽ちてボロボロになっている町家も在りました。しかし、有效地に使用したら、使えそうな町家もたくさん在りました。そこで、友人の小針剛に「西陣に来ないか」と誘ってみたのです。

彼は、2ヶ月間、西陣を歩き回り、約百軒の空き家を見つけました。その中から、妙蓮寺と大黒町を結ぶ線上に住居を構えてはどうかと提案しました。

妙蓮寺は、大本山で、私が住職をしている円常院は、妙蓮寺の塔頭寺院の一つです。この妙蓮寺が、ちょうど95年に創立701年目を迎える節目に当たり、207年間途絶えていた「御会式万燈会」を復活させ、

同時に手作り市・フリーマーケット「西陣樂市樂座桃山文化村」という催しを行ない、地域に開かれたお寺を目指すと共に、地域の活性化にも寄与できないかと考えていた時期でもあったのです。

また、大黒町というのは、町内で「大黒町づくり協議会」と称する会を結成し、町内の景観について、協議をする場を持つていました。

いずれ、この2地点が西陣にとって重要なキーポイントになるであろう予想を立て、彼に薦めたのが、寺之内通淨福寺東入の現在のレトロ雑貨「龍華堂」です。

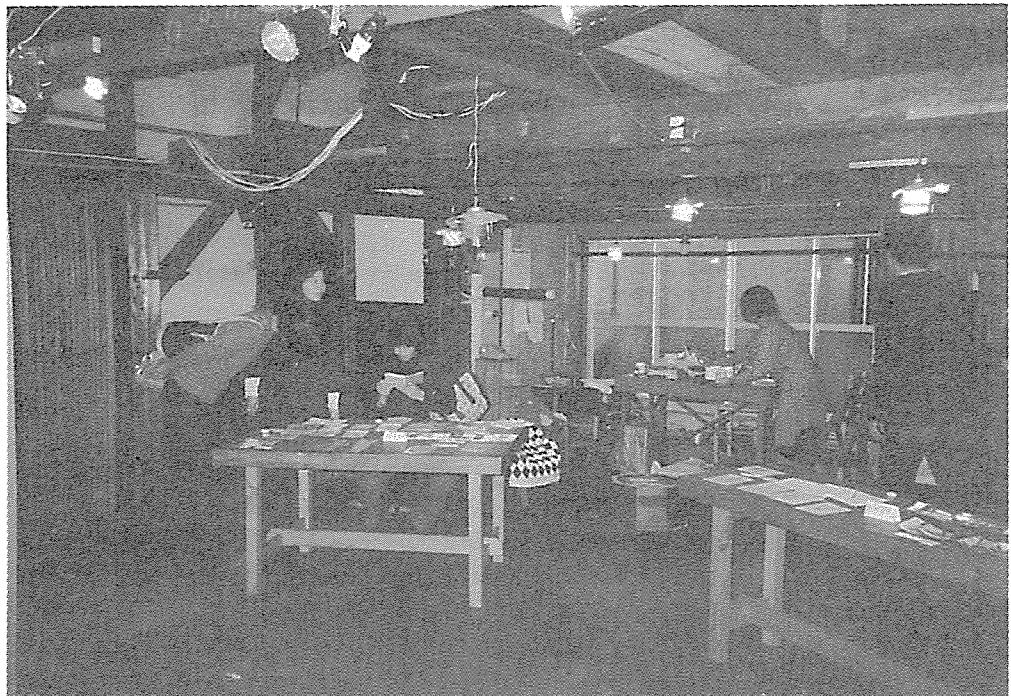
こうして、スタートした佐野と小針の隠れ家的な町家利用は、各方面に波紋を呼び、新聞、雑誌、テレビ、ラジオと報道機関に紹介され、それを見聞した視聴者からの問い合わせが一日60本の電話という形で押し寄せました。問い合わせのほとんどが、若いアーティスト系の人で占められているのが特徴的でした。

家の中に草が生えている、畳が腐っている、根太も落ちているという状態で、大家さんが「本当に住むんですか?」と疑問視した家であった為、よけいに関心を呼び、再生された時のマスコミの反応は、興味深いものがありました。

自分たちで修理した為、友人の大工さんや電気屋さん、左官屋さんに手伝ってもらい、安価で仕上げることが出来ましたが、伝統的な家屋には、それなりの工夫がなされているだろうと考え、なるべく現状変更はしないようにしました。

この時点では、私たちは、町づくりを視野に入れていませんでしたが、マスコミ報道の余波は、私たちが入居希望者に対する説明会を開かなければならぬ事態になっていたのです。

そこで考えた名称が「西陣活性化実顕地をつくる会」だったのです。名称の名付け方にも理由があり、横文字に変更する社名



西陣ファクトリーGARDEN～西陣織ネクタイ工場跡をアーティストが協同で経営するアトリエ兼ギャラリーがブームになっている昨今、難解な長い日本語の名称の方がインパクトがあるのでないか、これは対外的なことを意識した結果です。

説明会に集まった人々は、ほとんどがアーティスト系で、西陣の町家の構造が、ものづくりに適した住環境であるということをいち早く見抜いていたようです。

西陣の町家は、西陣織りという巨大産業の集中する地域にあって、機織り機を奥の土間にすえ、職住一体の生活を営む空間として機能してきました。それが、昨今の着物離れや工場の地方移転などで、職人さんの住居が空き家になったり、会社の倉庫に変わり、人々、賃貸物件として利用されていなかつたので、放置されるという状況に至ったのです。

放置されている空き家を活用することによって既存資源の有効利用にならないか？不動産物件としては取り扱いが困難な修理を必要とする物件でも賃貸の方法さえ変えれば、賃貸が可能なのではないか？

そういう可能性を現実のものとしていったのが、西陣活性化実験地をつくる会の初期活動でした。

修理は基本的に借り手が行う。大家さんは、なんの修理も行わない。契約は、更新期間を設け、現在の賃貸契約書に基づくが、修理を借り手が好きなように行うため、敷金・礼金など京都独自の慣習も少なくてすむ。保証人は、各自で用意する。あくまで西陣活性化実験地をつくる会は、大家さんと借り手を結ぶ仲人として機能する。

そのため、私たちも空き家を見つけたり、入居希望者自ら、西陣を歩いて、町の雰囲気や空気を感じてもらい、空き家を見つけるという地道な努力が必要なのです。

その結果、99年7月現在で34件が実現しました。ただ、空き家の数は、数百件にものぼりますが、賃貸物件としての空き家でないために、貸していただけないという状況に変わりはありません。

一番のネックは、相続税が発生した場合に他人に賃貸していると、出でていってもらうのに、問題が生じるおそれがある。そういうトラブルに巻き込まれた古い賃貸契約をしてきた人の話を聞いている。そういうことがネックになって、なかなか貸してはもらえない。

しかし、そういう問題は、解決に時間がかかるものであり、一朝一夕には解決しないものですから、私たちの活動が各報道機関を通して浸透してゆくのを待つしかないわけです。

この点に関して、行政はどう関わっているのかという点ですが、行政はまったく関わっておりません。町家の保存運動が学問上の問題として捉えられていた時期、いわゆる空転していた時期に、私たちが非常に現実的な選択肢を示したことによって、いつ



心呼吸～輸入雑貨と無国籍料理のお店兼住居

きに町家への感心がお金のない若手アーティストたち大衆に広がったといつても過言ではありません。

それまでは、伝統的京町家の修理は非常にお金がかかり、時間もかかる。貧乏人には縁のないものとされてきました。しかし、京都の町並みを形成している京町家のほとんどは、耐震性もあやしい、不動産物件としては、土地だけの値段しかつけてもらえないような傾いた物件なのです。保存に値する京町家といわれるものは、その数が限られており、数えるほどしかないのではないかでしょうか。

個人的見解ですが、京都は東京と同じであっていいのだろうか？ 空襲をうけている都市であるにもかかわらず、現在の京都は、焼け野原になったのではないかと思われるほど変貌しています。



チャイ屋ぶーら～チャイとカレーのお店兼住居

老朽木造家屋が壊されてゆくことには、しかたのないものがありますが、その後に無国籍のような家屋が建ってゆくことには、ここが日本であることを考慮すれば、かなり変なことだと思われてなりません。

京町家の美しさは、それがパターン化されたデザインのように、連なって、町並みを形成しているからであって、単独で、博物館に展示していても美しくもなんともありません。

話を元に戻しますが、要するに伝統的京町家の賃貸物件に対する公的な保証人制度などがあれば、もっとスムーズに事が運ぶのではないかと思われます。

この4年の活動を通して、仲間が増え、ある人物が核になって、演劇やパフォーマンスの会場運営をする、毎週金曜日の夜に

誰でも参加できる「金曜夜会」を開催してくれる、そこで出会った人がネットワークを組み、西陣を会場にして芸術活動をする、入居してくる人もある、興味のある企画を持ち込んでくる、というような事が繰り返され、核になってくれる人を巻き込んでだんだん大きくなってきたのです。

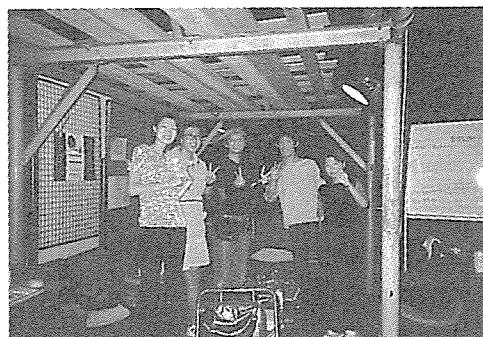
今年春には、対外的な視察や質問に個人的にアーティストたちや私たちが対応することに限界を感じるようになりました。それほど、有名になってしまったわけです。

そこでネットワーク西陣とは独立した形で、町家の仲人を中心として、アーティストの情報や作品など、西陣で起きていることを集約した形で情報発信を行うために、「町家俱楽部ネットワーク」というものを地もと有志のご協力のもとに開設する運びとなったのです。

7月26日にホームページを立ち上げ、(www.machiya.or.jp) 正式にオープンしてから、10月初め現在で、約2ヶ月ですが、ヒット数は、7000を越えております。この数字からも全国の人たちがどれほど京町家に魅力を感じておられるかがわかるというものです。

ヒット数の1割が興味をもって、アポイントメントを求めてきます。そして、そのうちの1割が実際に入居希望エントリーフォームに記入して、物件の紹介に参加し、最終的に大家さんが気に入った人とお見合をして成立するのですが、この2ヶ月で10件のハイペースです。

町家俱楽部を立ち上げると、不動産物件紹介所のように思われますし、西陣活性化実験地をつくる会も町づくり団体と見なされるのですが、私たちは、楽しいことをしないか？という仲間のネットワークをつくっているだけなのですが、波及効果として、町に若い人たちが入ってくる、町内行事に参加してくれる、お店やイベントをすることによって、たくさんの人たちが集うようになってくる。西陣という地名が織物以外の話題で何度も採り上げられることによつ



町家俱楽部ハウス～西陣織の帶の工場跡。町家俱楽部ネットワークの事務局及び多目的ホールがある。（写真は筆者とボランティアスタッフ）

て、西陣のイメージアップにもつながる。京町家の保存活用に対する啓蒙にもなっている。これらはあくまでも波及効果であつ

て、初めからそれらを目標にした町づくりを行っているのではないというのが特徴です。

特集 5～コラム・1

グローバル時代の 地域産業@京都

中尾 憲司
NAKAO KENJI

なごみ庵

1998年8月、「なごみ庵」は京都にオープンしました。そこは、関西の夢熱き若者のアジトであり、東山山麓の一軒家で、12畳の交流スペースと8畳の事務室を有する8DKの情報発信基地でもあります。そして、このアジトから、若者の町づくり参加をサポートするNPO「京都サロン」が生まれました。

「京都サロン」は、1998年6月の参議院議員選挙で、公開討論会を企画した学生達が中心になって発足しました。現在では、この「なごみ庵」を基盤に様々な活動を行っています。まず2週間おきに、産官学の様々な方々を講師にお呼びしたトークライブ「獅子の泉」を開催し、インターネットを使って京都のNPO活動を伝えるメールマガジンを約1000名の読者に毎週発行しています。また、京都市の自治100周年記念イベントや、KBS京都の地域振興券調査、稻盛財団の京都賞に協力し、独自では京都の学生と様々なNPOが交流する、1000人規模のマッチングイベントを企画しました。そして、私は「なごみ庵」の設立者かつ「京都サロン」の代表として、一貫してこれらの活動をプロデュースしてまいりました。

さらに、「京都サロン」を設立する以前の1994年から97年までの4年間、私は国際異文化理解と国際ビジネスリーダーの育成を目的とした、世界最大規模の学生団体・国際NGOであるアイセック（国際経済商学学生協会）で活動していました。その中で、関西地域代表として関西における産学交流企画、起業家育成企画を多数実施してまいりました。

さて、そういったこれまでの経験から、私は京都という街は、これからグローバル化の時代において、日本の中でも、特に面白い地域だと言えると思っております。なぜなら、これからの時代は、国家単位ではなく地域単位で動いていくと思われるからです。その際に、地域のアイデンティティー、言いかえれば、文化・慣習などその地域で共有されている価値が、地域を動かす原動力になると思うからです。しかし、地域で共有されている価値そのままでは、その価値をグローバル社会で流通させることはできません。地域で共有されている価値を、グローバルな視点で捉え直す必要があります。まあ、京都に来た外人さんの視点とで

もいうのでしょうか。その視点から、京都を再構築できれば、1200年以上の間、人間の息吹を蓄えたこの京都という地域は一気に一大情報発信基地、価値の発信基地へと変化するでしょう。その為には、グローバルスタンダードの中で公用語と化している英語と、情報を受発信するためのインターネットインフラ、そして、実際に世界中で流通するデジタル素材が不可欠な道具となります。これからビジネスの基盤は、附加值でありビジョンです。そういったことを考える時、京都は1200年以上の歴史の中ではぐくまれてきた歴史があります。つまり、デジタル素材のための素晴らしい資源を持っているといえるのです。そして、今後はこのデジタル化のための資源が、ビジネスのための資源へと変化していく時代です。これは、京都には大きなデジタルビジネス資源があるということを意味しているのです。

しかし、京都は筋を通すことを大切にする街です。物事の順序を大切にするあまり、貴重なビジネス素材をうまく活用できず、諸外国に利用されてしまうことにもなりかねません。そうならないためにも、主体的な住民の参加及び協力と、俊敏な意思決定が求められると思います。NPO（非営利組織）というのは新たな人のつながりを作り、公的なサービスを早い動きで実現していくという意味で行政とは違う役割があり、活躍が期待されます。ただ、何よりも、市民一人一人がもっとグローバル規模で物事を考え、行動して行く自立性が求められるでしょう。そういう地域の意思決定や市民の自立という意味では、京都の伝統が逆に足枷になっていることもあるように思われます。これからは、よく言われるように、「Think globally, act locally.」の時代です。特に京都は諸外国との交流が頻繁なだけにより意識する必要があると思われます。

現在、日本は国家レベルで、価値及びシステムの一大転換期を迎えてます。その中で、起業や新しいまちの仕組み作りが求められています。つまり、現状に対する捉え方を変えることが求められている訳です。京都には新しい仕組みを作る資源はすでに十分あります。インフラは、多少必要かもしれません。デジタルインフラ等の情報インフラの整備と市民の自主的活動を支える場の整備などは。でも、できるだけ少ない

ハードの Change で大きな成果をあげる方が、Ecological で Smart なやり方だと思います。そして、そういった デジタル情報インフラの整備、新しい仕組み作りに若い人々の意見も取り入れてくれる大人達の存在、さらには 変化と創造をどんどん取り入れていく創造的な雰囲気。以上の 3つを合わせ持つ地域が、若者が新しい地域産業創出をしていくに当たって、魅力的な地域ではないでしょうか。京都には伝統という敷居があります。敷居は高すぎてもいけないでしょうし、低すぎても京都の良さをうまく

表現できないかもしれません。良い塩梅の敷居が今の京都には求められていると思います。ただ、伝統とは「常に変化をして時代に合わせてきたもの」を指すように思います。今は社会が大きく変化をしている時代です。伝統も社会に合わせて多少は変容する必要があるように思います。しかし、総体的に見たときに、独自の文化を豊富に持つ京都はこれからも、若者にとって、面白い地域であることにはかわりはないといえるでしょう。

特集 6

京都・伏見のまちづくり

吉田 秀雄
YOSHIDA HIDEO
京都市都市景観課

1 港町から酒造の町へ

1929年(昭和4)に伏見市が誕生した。秀吉が城下町として開いた(1594年建設着手)京都市南端の町で、水に恵まれ、また悩まされた水郷の町である。2年後に、京都市と合併して伏見区となり、約70年となる。伏見の町の発展を振り返ると水の恩恵の歴史である。16世紀末、天下制覇の砦として、伏見城と町が築かれるが、築城後間もなく、その拠点は大坂に移された。徳川幕府の天下統一が完了して、1623年に伏見は幕府の天領地となり、新たな発展の方向を探ることとなった。

角倉が伏見から洛中の二条まで、高瀬川を開鑿していたことから、商都大坂と洛中を結ぶ船運の中継港となり、また西日本からの参勤交代の宿場町の役割も加わり、近世期は流通都市として発展し、人口3万人を数えたといわれる。

明治維新、鳥羽伏見の戦い(1868年)で、淀や伏見の市街地は焼かれた。鉄道の開通により水運は衰退し、産業転換に迫られた。良質の豊かな地下水、鉄道の開通、醸造技術の革新により、醸造地として活路を見い出し、1911年(明治44)に農商務省の全国清酒品評会で多数の銘柄が入賞し、酒造業の集中に拍車をかけ、一大醸造地として発展した。

酒造及びその販売には、多くの関連業を必要とした。酒樽・酒造器具・出荷用の容器などの製造、商標や宣伝ポスター、季節労働者へのサービスの提供、そして酒蔵の建設など、地域関連産業が発展した。高度経済成長期の1970年迄は、生産拡大が続き盛況を極めた。

2 伏見の町

秀吉は、伏見の市街地を、堀を開鑿して生じた土砂を盛り上げて宅地造成を行い、城下町を完成した。城下町内は、地上げにより水害から守られたが、区域外は宇治川の遊水池状態であり、近代に入っても市街

化は困難であり、水防事業が条件であった。

このような制約を持つ伏見では、酒造業は格好の基幹産業であった。酒造の時期は冬季であり、杜氏をはじめ酒造に従事する人は、農閑期に農村地域から季節労働者として集まった。寮で寝泊まりして、春には故郷に帰った。このような生産システムは、市街地を拡大する必要はなく、旧市街地で対応が可能であった。高度経済成長期後に、伏見は大きく変化する。農村人口の減少や所得の向上により、季節労働者が年々減少し、かつ生産工程の効率化や合理化も酒造業維持の条件となり、各工程の機械化が進められた。関連産業も自然素材による製品から新素材に移行し、地場産業を縮小することとなった。町の産業の主力は製造から販売・観光という三次産業に求められるようになった。

町が開かれ400年の歴史を持つ伏見に大きな変革が訪れている。近代期を牽引してきた酒造業は、日本人の嗜好の変化(表1)もあり、出荷量(表2)を減少させている。

伏見統計

表1 全国の酒類の消費動向 単位 円

	1987年	1990	1994	1997
酒類	50115	53832	55945	52870
清酒	13360	11937	11672	11174
焼酎	3440	3250	3704	4001
ビール	24808	29952	33034	30233
ワイン	1038	1268	1304	2178
ウイスキー	6042	5771	4562	2911
他	1427	1654	1669	2373

資料：総務省家計調査年報

表2 酒税課税数量 単位 k1

	1980年	1985	1990	1993	1996
全国	1497350	1390941	1421977	1421279	1253465
伏見	184677	164608	160818	161479	151579
瀬	490492	413393	419306	427485	360236

資料：国税庁統計年報告 大阪国税庁統計書

近年、中堅酒造業が転・廃業している。伏見管内で1980年に38社あった酒造業は、現在、27社と1組合となっている。新たに醸造地を求める資力のない酒造業の廃業の

理由として、販売価格の値上げが出来ない状況下で、年々都心化する旧伏見では、固定資産税の負担にも耐えられない産業であると指摘される。

3 近年の町の変化

1981年、廃業された酒蔵跡地に共同住宅を建設する計画が近隣に明らかにされ、2階建町家が軒を並べる地区での高層建築は、大きな議論となった。近隣住民による建設反対の協議会が設立され、2年余りの活動がなされたが、その途中、反対運動だけでは町は良くならないとして、伏見のまちづくりを研究する研究団体に組織替えされ、酒造りと商業と居住が共存でき、かつ子供を安心して育てられる町づくりを目標に多角的な活動が展開されることになった。

このような活動とは裏腹に、問題となつた共同住宅も竣工し、その後も、相続対策としての町家の共同住宅への建替え、酒蔵や駐車場の共同住宅化など、不動産活用の高層建築が建設され、伏見の景観を変化させた。洛中に比較して、地価が安い、交通が便利、買い物が便利で物価が安い、公共施設が整っているのが共同住宅建設の理由である。

そこで、旧伏見の近年の変化を人口と家屋面積で追ってみる。旧伏見とは、住吉、板橋、南浜の3学区（旧伏見）、かつての城下町の市街地である。

表3 人口・世帯

人口（表3）は、ピーク時の60年に4.1万人を数えたが、95年には3.1万人と減少しているが、世帯数は1万世帯か

資料：国勢調査

ら3,600世帯増加している。単身世帯が増えた結果である。事業所の従業者（表4）を見ると、この15年間で僅か500人の增加で、製造業の約1000人の減少を店舗とサービスの増加でカバーしている。次に建築延べ面積（表5）で見ると町の変化が顕著であることが判る。この20年間で併用住宅と工場が減少し、共同住宅と店舗が増加している。中でも共同住宅が20haと圧倒的な増加である。全体の床面積も倍増して建築の過密化を示している。人は減るが建築は増えるという、近年の景況は建築投資に因ることを示している。因みに人口1人当たりの住宅床面積は50となり、数字的には供給過剰を示している。

表4 事業所従業者

年次	全	製造	卸小売	サービス
1981	18586	5288	6064	3304
1991	19115	5859	5685	3743
1996	19176	4434	6164	4321

資料：事業所統計／製造、卸等は内数

表5 土地・建築 単位 ha

	1976年	1991	1996
戸建住宅	49.8	58.2	60.0
共同住宅	8.2	23.4	28.3
併用住宅	17.6	16.0	14.1
商業	9.9	19.7	23.4
工場	34.6	31.5	32.3
他	4.2	4.1	3.8
床計	124.2	153.0	161.9
課税土地	189.7	191.3	189.8
1階床	84.1	83.9	82.3

資料：固定資産データ

4 景観地区の指定

伏見は、人口3万人、昼間従業者2万人と昼夜間のバランスのとれた都市であり、



東本願寺別院前上油掛町の修景された酒造

住・商・工が混在する魅力ある都市である。

旧伏見のエリアを対象に1996年5月に「美観地区」を、そして翌年3月に商業と酒造業が密度高く集積する南浜学区の中心部に「界わい景観整備地区」を指定した。伏見らしい町並景観の維持・増進を目的としている。特に、和風酒蔵と町家が混在して演出されるリズミカルな景観構成作法を継承することである。これは安易なことではなく、今様の不動産活用による利益開発を否定する勇気を伴うものである。美観地区的指定により、河川沿いや酒蔵集中地域など景観上重要な地域は建築物の高さ15m

以下の制限が加わり、界わい景観整備地区の指定により、その区域で高さ15mを超える建築をする場合は、景観シミュレーションが義務付けられる。それ以前では、建築確認のみの申請で、建築可能であったものが、市と建造物のデザインを巡り議論が行われ、更には、地域の住民も加わり、設計が確定され、地域にふさわしい建築が建ち始めている。伏見らしさ、即ち地域にふさわしいものはなにか?が問われることとなった。地域の産業の在り方と環境デザイン取り組みのスタートと思える。今後の成り行きを注意深く見守って行く必要がある。

特集

7

陶磁器の街・五条坂の20世紀

清水 泰博
KIYOMIZU YASUHIRO
SESTA DESIGN
広報・出版委員

1 共同窯の解体

1999年の今年8月、ついに五条坂鐘錠町の共同窯が解体され更地に変わった。ずっと使われないままに放置されてきた姿をいつも見てきた者にとっては、その今にも壊れそうな建物であっても、その内部に登り窯が残っているということで、昔の五条坂の姿を残すモニュメントのようにどこかで思っていた。

壊されるということを聞いてはじめてその内部を見せてもらった。この窯は五条坂最大級の登り窯で、昭和45年の大気汚染防止条例による窯の排煙規制後も使われた窯らしく煤塵除去装置も装備されていた。当時としては窯が、そしてそこを利用する人達が生き延びる為に、最も進んだ登り窯が作られたことが伺われた。だがその窯もその後の火事騒ぎ(昭和55年)からその使用が中止されたのである。

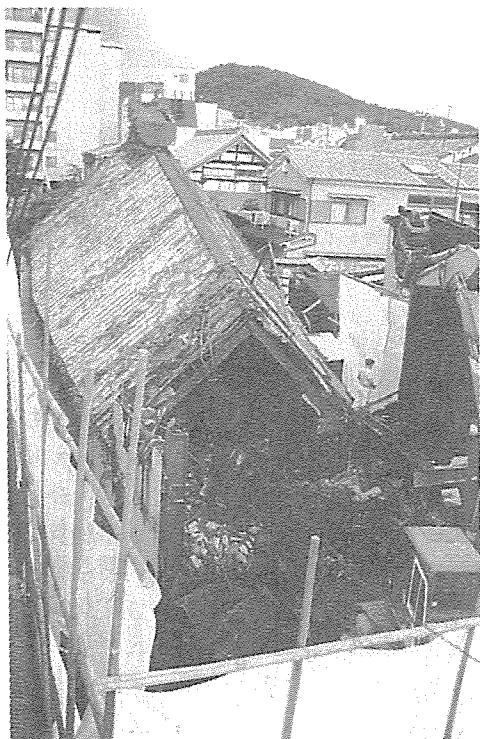
陶磁器の街・五条坂は江戸時代からやきものを主産業として栄えてきた街である。そしてその街で私の家もずっとやきものを生業(なりわい)として暮らしてきた。

2 五条坂の20世紀

今世紀にはその五条坂の街を根底から振り動かすような出来事が何度かあった。

その一つは第二次世界大戦時の強制疎開である。戦争による火事からの延焼の防止の為に道幅を拡幅したもので、その時に潰された家々の跡が幅50mの道路として今の五条通りとなっている。当時の五条通りは幅数mの細い道で、拡幅により五条坂は文字通り南北に分断されてしまったわけである。そして現在、既に50年以上が経っているというのに家々が壊されることによって表に出てきてしまった裏の街並みはいまだに元には戻っていない。それは南北の街並みの違いが今も歴然と物語っている。

もう一つの大きな出来事は先にも書いた、煙に対する規制によって街から登り窯が姿



解体されていく共同窯(1999年8月)

を消したことだ。登り窯がガス窯、電気窯に移行した訳だが、このことは単に街から煙がなくなっただけでなく、窯を中心に出していた街のコミュニティがバラバラになり、それぞれが個人的に窯を持つように強制されたことでもあった。言ってみれば街としての地場産業が、個人としての地場産業に移行することもあり、街としてのまとまりを著しく弱めることになってしまったのだと思われる。元々五条坂は2、3人の小規模な工場が多く、そこでは寄合い窯といわれた複数の業者が寄合って使用する窯が多く存在した。その後窯元に使用料を払うのではなく自分達の窯を持とうとして生まれたのが共同窯で、当時7、80人が京都府陶磁器協同組合に加入して作られた。小さな集団、個人の集合で成り立っていた街は窯を中心にして街自体が一つの工場の



五条通り北側の街並み～元々の五条坂



五条通り南側の街並み～55年前に突如表に出た街並みは中層ビル街となり、いまだ混乱した状態にある

ようなものだったわけだ（震災で壊滅的な被害を受けた新長田が街自体が一つの工場のようなものだったと言われたのと同じようなものだと察せられるし、そのような形態こそが地場産業の街の本来の特徴の一つかもしれない）。そのような登り窯は、様々なところで作られた製品を最後にとりまとめ、作品に仕上げる場であると同時に、情報交換の場でもあり、職人達の連帯感を感じさせる場であったのだと思う。そしてその痕跡として残っていた窯が今年なくなつた。

3 街の変遷

戦前まで、五条坂の住民は9割までが清水焼に関連する業者で占められたやきものの街であった。それは登り窯を中心とした運命共同体のようなもので、だから煙のせいで筆筒の中にまでススが入っても苦情など出る土地ではなかった。そのようにいつのまにか工業団地のようになっていた五条坂は、その後いつしか住宅地街にもなってきていたのである。

何故登り窯を辞めなければならないのか。自分たちはずっと以前から同じことをしているのに、煙の不満を言うのは後から新しく入ってきた陶磁器とは関わりのない人達ではないか。といった愚痴を子供の頃よく祖父から聞かされた。その頃は子供心にも憤りを感じたものだが、文献でみると16

世紀末、既に五条坂南の山麓の清閑寺がやきものの生産地であった時代、秀吉が阿弥陀ヶ峰に豊国廟を築くにあたり清閑寺の窯の煙が廟をおおうというので、今の五条に移されて五条坂が出来たとも書かれている。そうすると歴史的に見てもやきものの街は、製造過程上発生する煙によって宿命的に常にその居場所を移動せねばならなかつたわけかもしれない。

五条坂も裏に入れば今も薬缶（やっかん）町、鐘錠（かねい）町、塗師屋（ぬしや）町、轆轤（ろくろ）町、問屋町といった地名が見られ、様々な産業の入り交じっていた様子が伺える。それがいつ頃からの名前なのかは解らないが、今やそれらの名前もありふれた一般的な町名に変えられつつあり、あたかも古い絵の上に新たな絵の具が塗り重ねられていくように、時代と共に移り変わってきた地場産業の街の個性が消えていくようだ。

そしてこの数十年、また大きく街並みが変わってきたことが解る。ひとつはバブル期に低層の街並みの中に中高層のビルが進入してきたことであり、その時点では新たに作られた共同住宅のビルだけでなく、陶磁器関連の建物もビルに建て替えられた。そしてその後の今に続く不況期には陶磁器関係のビルが全く違う業種のビルに様変わりしたりすることが起こっている。五条坂

だけでなく今熊野、泉涌寺あたりの陶磁器の街でも不況により工場が閉鎖し、その跡地にマンションが建つといったことが見られる。このようなことは何も陶磁器の街だけの話ではなく、京都に共通して起こっていることではあるが、まとまった土地のある工場跡地はマンション等にうってつけということだろうか。

4 陶磁器の街の将来に向けて

京都の地場産業・陶磁器の将来について希望の持てることを何か書こうと思うのだが、なかなか新しい姿を見つけだしにくい。陶器の碍子から発展した京セラなどの企業もやきものからではないかと言われるが、京焼、清水焼の世界からはどうも別の世界のようで馴染めない。やきものから生まれた碍子産業、更にそこから生まれた半導体産業はもはや清水焼の世界ではないというのが陶磁器に関わる人々にとって共通の認識のような気がする。

今回のJUDI Newsの特集に関しては、京都の地場産業と街の将来について、出来るだけ可能性のある部分、胎動の感じられる部分を探り上げていこうと考えた。今の京都の悪い部分を言うことは誰にでも出来ることで、視点を変えていい部分を見いだすことが今回の特集の方向だと思っていたからだ。特に自分では陶磁器の街については書かざるを得ないだろうと当初から思っていたので、いろいろと新たな動きを探そうとするのだがなかなか思うようにみつからない。

ただ、今は胎動は見えないがまだ盛り返す可能性は秘めているように思っている。生産体制について言えば、以前からの小規

模生産体制は変わらず、個人的に窯を持つようになっている為、極端に言えば誰もが作陶出来るようになったと言えるのかもしれない。その為か現在も陶磁器に携わる若者が減っているわけではない。逆に彼らはしがらみがない分、昔に比べればずっと容易に作陶に入れるようになってきている。土地のない五条坂あたりには工房を構えることが出来なくとも郊外に土地を求めることは容易だからだ。京都の南の炭山あたりには陶芸村のようなものが出来ているし、北の美山や西の西山高原あたりには陶芸だけでない、新たな芸術家村が出来つつある。以前のような一箇所に集中した地場産業街ではなく各地に分散した産業の構図が出来つつある。

そうすると五条坂はどうなっていくのか。私は販売等を中心とした街になっていくのが妥当なのかもしれないと思っている。清水寺という観光スポットを間近に控え、多くの人が近くまで来ているというポテンシャルは既にある。清水坂に比べれば下の五条坂へはあまり行かないのが現状だが、その状況もこれから街づくり次第のように思われる。

今その五条坂から清水坂に見られる陶磁器の小売店、問屋などを見ていて思うのは店の個性をもっと出せれば面白い街になるのではないかといったことだ。今は小さな店がそれぞれ小さな百貨店を目指しているようで、そういう限りは大きな一軒の百貨店に負けてしまう。個々がもっと専門店化し、それぞれ個性ある店の集合体としての街が出来れば、それはとても魅力的なことだと思うのである。

当初は水力発電ではなく、水車の動力源として位置づけられていた。そのために蹴上付近はこの水力を利用する様々な工場が立地する所として整備されるはずであった。蹴上から鹿ヶ谷にかけて水路を設け、そこから山裾に沿っていくつかの支水路を分岐させ、支水路に沿って水車を備えた工場群が立地するという構想だったのである。この構想が実現していれば、蹴上から南禅寺にかけてのたたずまいはガラリと変わっていたであろう。

しかしアスペンを訪れて水力発電の可能性を確信した田辺は、帰国後水力発電を基礎にした疎水計画に転換することを市会をはじめとする各界に説いてまわることになる。今も遺構を残す蹴上の発電所は、黒部ダムなどを見慣れたわれわれにはいかにも小さな水力発電所という印象であるが、こ

特集 8 ~コラム・2

アスペン・京都・ ウィーン/パリ

河合 満朗
KAWAI MITSUO

株式会社・ディー・アイ

今から10年前、できたばかりの岡崎の疎水記念館で、展示されている田辺朔郎の自筆のノートに「アスペン」と書かれているのを見た時は感激した。

その年に私は疎水とはまったく関係のないある調査のためにコロラド州のロッキー山脈の中にある小さなリゾート都市アスペンを訪れていた。そのアスペンの歴史をひも解くうちに、ここがロッキーの清冽な水流を利用して、世界で初めて商業水力発電を始めた町であることを知った。そして約100年前に、京都で疎水を開削した田辺朔郎が、この町を訪れていようなどとは夢にも思ってはいなかった。

京都の近代化の最大のインフラである疎水は、工業用水、水運、エネルギー供給など多様な都市機能を果たした。そのうちのエネルギー供給機能は、疎水が構想された

の小さな発電プラントが京都に古くからあるものを残し、京都に新しいあるものをもたらしたのである。

アスペンは田辺が訪れた頃が銀鉱山として全盛期であった。鉱山での動力として水力発電が世界に先駆けて取り入れられたのである。しかしその後、銀本位制の撤廃とともにあってこの町は見る影もなく急速にさびれてしまった。

この町がよみがえったのは、戦後のスキーブームにスキーリゾートとして再開発されたことによる。そしてその後は、人文研究所や音楽学校などの文化開発とあわせて、高質な文化リゾートとしての性格を強めていった。いまでは多くの芸術家や文化人が集まる町として有名である。そのシンボルは、秋に金色の輝きに黄葉するアスペン・ツリーである。

水力発電が結ぶ太平洋の東と西の二つの町の歴史と現在は、かなり重なるものがある。私はアスペンの町は涙ができるほど好きである。しかし、プライベート空間以外は全市禁煙の町なので、あまり行きたくはない。

* * * * *

田辺がアスペンを訪れたのは明治21(1889)年のことであった。その後5年の明治26(1894)年には平安奠都1100年記念事業の第4回内国勧業博覧会が岡崎で開かれた。この時、伏見から博覧会の会場正門を経て南禅寺までチンチン電車が走った。電力は蹴上発電所から送電されたものであった。

こうした京都の近代化の過程で、明治32(1899)年、初代京都市長内貴甚三

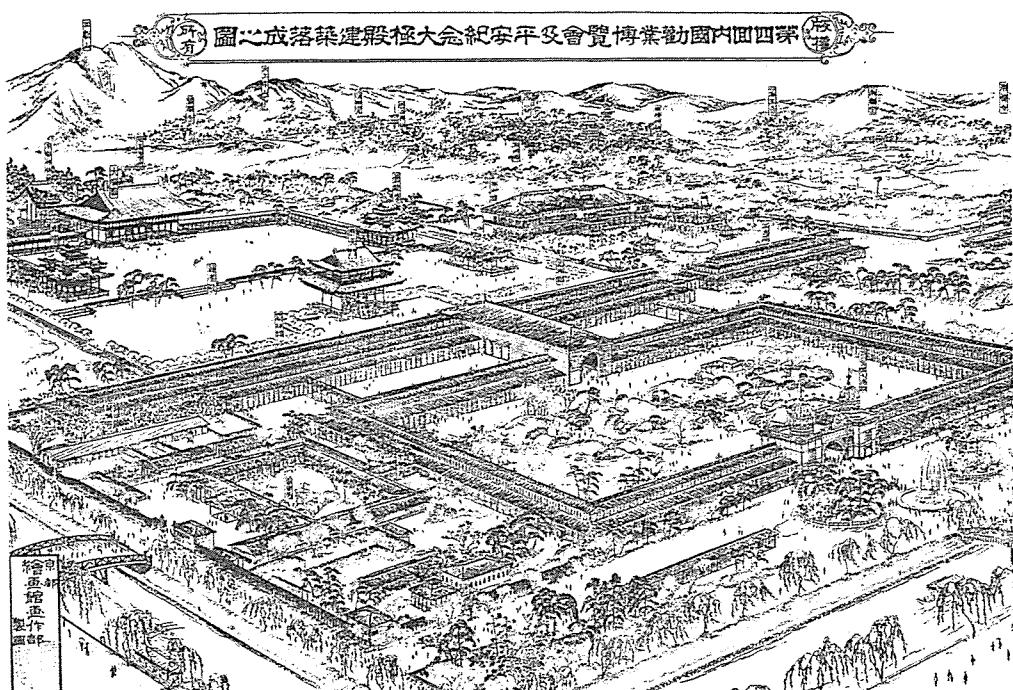


市電の開業を祝う花電車 明治45年（1912）

郎は、疎水事業後の京都振興策として道路の拡幅と下水道の整備をあげた。そして道路の拡幅は、行幸道路として南北に烏丸通を整備すること、東西に御池通を整備することとした。烏丸通はさておき、この時東西の幹線道路として「史上有名ナ三条通ヲ拡幅セズ」御池通が選ばれたのはなぜであったのだろうか。ここにおいて、現在の歴史的景観を残す三条通と、「シンボルロード事業」がいま行われようとしている御池通の二つの道路の性格づけがなされたのである。

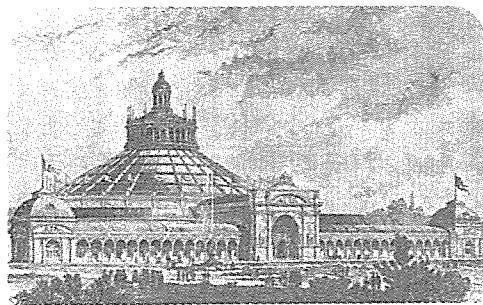
当時の内貴市長が、数々の内国勧業博覧会が開かれた岡崎に立って、御池通の先に見たものは、はるかヨーロッパであった。彼は「シベリア鉄道完成ノ暁ニ思ヲ及ボシタルモノナリ」と述べている。岡崎から御池通、二条駅から山陰線を経て舞鶴へ、そしてシベリア鉄道を経て、ウィーン、パリへと彼のビジョンはつながっていた。

京都をはじめとする当時の日本の博覧会ブームは、欧米での博覧会ブームを反映していた。ウィーンやパリでの万国博覧会は、当時の殖産興業の本流であるアーツアンドクラフトの全盛期の表徴であった。その後



第四回国勧業博覧会及平安紀念第極殿建築落成之図

万博は工業重視のアメリカ型に移行していくのだが、それにしてちょうど100年前の都市ビジョンに世界的視野をもち、京都の道路一つの拡幅にそのビジョンをもつてくるその「語り口」に、たんに大言壯語とかたずけることのできない共感をもってしまうのはなぜだろうか。いまポンデザールの話はどうなっているのだろうか。



ホールの外観（ウィーン博・1873）

特集 9

姉小路界隈に見る まちの豊かな循環

石本 幸良
ISHIMOTO YUKIYOSHI
石本 智子
ISHIMOTO TOMOKO

京・まち・ねっと

1 姉小路界隈といまち

京都の人は「あねこうじ」ではなく、「あねやこうじ」と呼ぶ。その名の通り、この界限は様々な業種を営む老舗と、小さな商店と、町家を含めたごく普通の住宅が建ち並ぶ、やさしい落ちついいた印象のまちである。都心にあって、中低層の建物の多い町並みからはどことなくまちの人の生活の匂いを感じ取ることができる。昔から住のあたたかみと職の活気が響きあい、育みあって栄えてきたまち。ここでは、そうしたまちと生業（なりわい）との関係性という観点から、私が関わることになった「姉小路界隈を考える会」の活動を通して、このまちの環境を考えていきたい。

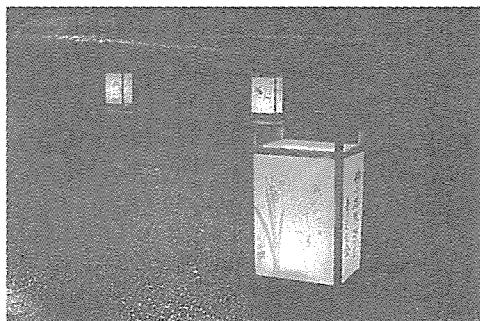
2 「姉小路界隈を考える会」の設立

私と界限との出会いは、平成7年7月、界限のマンション建設反対運動をめぐって、今後の活動展開についての相談を受けたことに始まる。その折りにこのようなトラブルでの問題点や、運動後の虚脱感・住民間の不信感について説明し、将来のまちづくりを見込んだ組織を作ることを提案した。その後何度かの勉強会を重ねた結果、姉小路通を中心に、北は御池通、南は三条通、東西は河原町通と烏丸通間の住民が参加して、平成7年10月に会が発足した。

3 「個性の表出」がもたらすもの

界限に点在する老舗には、それぞれ著名な書家による看板が掲げられ、老舗のファサードに独特の趣を添えている。会ではそうした「まちの顔」とも言える看板に着目し、「看板の似合うまちづくり」を最初のキーワードとして取り組んだ。

そうした目でまちを見渡すと、まちには



「灯かりでむすぶ姉小路界隈」

看板だけでなく、季節の花を生けたり茶釜を置いたりと工夫をこらしたショーウィンドウが数多く見受けられる。それらは単に商業的な意味合いだけでなく、その店の営業のあり方をまちに向けて発信する装置として、実に有効に機能していることが分かる。こうした意味では、多様な業種によるそれぞれの個性が、町家や一般住宅のなかにはめ込まれることによって、一定の色調を保ったモザイクのような、このまち独特的個性を醸し出していると言える。また、こうした個性の表出は、まちの外の人をも巻き込みながら、虫籠窓・京格子の復元や町家の再生、あるいはオモテを残しての建替、セットバック・軒庇をそろえての建替などといった、様々な「まちへの気配り」を促している。

4 まちの資源としての「ひと」

この界限にはまた、こうした特色ある老舗と共に、驚くほど洗練された伝統技術をもつ職人の工房も数多く見られる。当たり前のようにまちに溶け込み、まちの日常であるがゆえに、近所づきあいはしても仕事の内容は今一つ知らないままに…。そこで会では界限に住む老舗の主人や職の方にお話を伺い、紹介していく「姉小路にんげんマップシリーズ」を企画した。これは大変好評を博し、会の活動の柱として現在も継続している。

5 新たな目線の発見

また会では、まちにとけ込んでいる看板を浮かび上がらせようと、看板や町家を地蔵盆の夜にライトアップする企画も生まれた。この企画をもとに、昔町内を照らしていた辻行灯の話から、まち全体の灯りを考えるまでに発展した。そこで地蔵盆を前にまちの大人は行灯を、子どもたちはペットボトルの提灯を手作りするようになる。行灯は通り沿いに並べられ、ライトアップされた看板や町家を見やりながら、通りを行き来する。往年の夕涼みを思う人もいれば、灯りによって夢のように変化したまちを楽しむ人もいる。また、これを原体験として育っていく子どもたちに、思いを託す人もいる。

さらにこの企画によって、新たな目線レベルも意識されることとなった。交通量の多さにどうしても自分の頭より下の方に向いてしまう目線を、看板のかかった二階の軒先に上げることで、新たな空間が見えてくる。乱れつつあるスカイラインの修景という意味でも、さらなる展開が期待されている。「灯りでむすぶ姉小路界隈」と題したこの企画は、平成9年度から続けられ地域の恒例行事として定着した。これら「考える会」の取組の内容は、会報としてまとめ、年に4回のペースで、会員に配布している。

6 活動の広がりのなかで

会の設立のきっかけとなった、マンション建設計画は平成8年3月に白紙撤回されたが、その後、「地元に受け入れられ、相互に享受しあえる施設建設を目指したい」として、地権者より地元との意見交換の申し入れがあった。これを受けた会が近隣町内会に呼びかけ協議、提案を受け入れることで合意した。こうして、平成11年1月には「地域共生の土地利用検討会」が発足した。本会は検討会の委員として、また地元の連絡窓口として参加し、協議を重ねている。

会ではこれまで、まずまちを再発見するということに主眼をおいて、活動を開催してきた。その結果、近隣町内会や周辺の市民活動グループの理解を得、4年の歳月を経て、新しいつながりをつくることが出来た。検討会の設立は、そうしたつながりと地権者の地元への信頼感が素地となり実現したもので、まちの人たちが考える、まちの将

来像の一つの焦点を結ぶ試みとして注目を集めている。

7 伝統産業とまちと

さて、勿論まちにおいて生業（なりわい）が担う役割は、景観面だけではない。前述の検討会のワークショップにおいて、興味深いキーワードが抽出されたので、ここに紹介したい。

ワークショップでのキーワード

- ・まちに商家が非常に多く、昔から継承された親密な近所づきあいから、『お互い様・支え合い』という意識が強い
- ・商売人は常に家にいるので、町内の人との関わりが多い『表に開かれたつきあい』
- ・『損をしても隣で買え』という言い伝えがある
- ・商売上、建物（店）の形態や歴史的事物に対してこだわりを持っている
- ・文化人との交流や暮らしのなかの文化に支えられてきた伝統産業
- ・まちが積み重ねてきた信用が、個人や商売の信用となっている
- ・老舗はベンチャー企業である

キーワードで指摘されているように、この界隈には昔から商家が非常に多い。なかでも伝統産業に携わる商家の割合が高く、商売上、店の形態（伝統的町家）や歴史的事物（看板など）に対するこだわりを持っているため、景観に対する影響力は非常に大きい（「個性の表出」として前述）。また、伝統産業自体が文化人との交流や暮ら



日本画の画材の老舗「彩雲堂」

「目利き」の造る 京都の町並

道家 駿太郎
DOUKE SHUNTARO
岐阜女子大学

しのなかの文化に支えられて発展してきたため、まちの人の文化に対する意識が高く、まちに対する誇りや愛着にもつながっている。このように、人々のまちに対する意識は、身の回りからまち全体に及び、広い視野でのまちづくりを可能にしていると言える。

一方で老舗にとってのまちは、支えられる存在であるとともに、非常にシビアな評価を与えられる存在でもある。長い歴史をもった老舗ではあるが、昔と同じ展開で継続している老舗は非常に少ない。文化の質が高く、洗練された地域をアンテナにしながら、アレンジして全国に発信するのが老舗であり、伝統と進取の気性を併せ持ったベンチャー企業であると言える。また、そうしたまちに立地していること自体が、対外的な信用となって老舗に還元されているとも言える。

8 まちの豊かな循環

さらに『損をしても隣で買え』という言い伝えにもあるように、まちのなかに商家を下支えしようとする意識が非常に高い。その意識がまた商家に人を集め、つきあい

1 物づくりを支え伝承するシステム

京都は良く知られているように江戸時代から質の高い様々な製品をつくりだしていた。

一方現在と同様に多くの人口を擁していた江戸は、物造りの面では日常の製品についてはそれなりの物が出来ても、品質の高いものについては各地からの供給に頼る消費都市であった。

その様な優れた製品の代表格が京都、大阪を代表とする「上方」の物である。

中世を通じ首都であった京都や、経済の中心地大阪、堺にはその経済力と朝廷に連なる文化的蓄積により、優れた製品を生み出す熟練した職人の技術蓄積があり、これらの製品の商品力により江戸へ様々な工芸品や加工食品が送られていった。

今日に於ても伝統的工芸品の多くが京都に根付いており、江戸で育った工芸である江戸千代紙でさえ京都の工芸品と錯覚され、京都の土産物店に置かれている状況であり、数百年に及ぶ物造りの伝統は遺伝子の様に都市の一部ともなっている。

物づくりの上で京都らしさが話題となるが、その造形様式自体で定義することは極めて困難である。

現代の工芸家にとっては過去に京都で造られた伝統的様式の作品を単になぞるだけでは創作意欲を満足させる事が出来ない。

の場・情報提供の場として、まちの人同士の関わりを深めることにつながっている。商家を媒体とした人のつながりが幾層にもわたって成立しているのである。

このように、まちと生業（なりわい）とは非常に密接な関係にあり、そのベクトルは決して一方通行のものではない。まちの文化や歴史がなりわいを生み育て、なりわいがその育みをまちに返していく。まちのなかのこうした豊かな循環は、まちを構成する様々な立場の人に安心感と支え合いをもたらしている。

9 まちの新たな流れ

こうした土壤のなかで、最近は、一旦地域から離れた子世代が親の商売を継ぐために戻ってくるという傾向が見られるようになった。また、戻ってきた子世代や店の従業員が近隣のマンションに居住する例も見られる。統計上は別々の家でも、両方が行き来しているネットワーク居住の例である。こうした例はまちの新しい施設であるマンションを、どのように受け入れ、まちの新しい活力にしていくかを探るための、一つの重要なファクターになるものと考えている。

造形様式にあると言うよりはその技術自体にあると言えよう。例えば磁器の器の繊細でシャープな角の仕上げや、洗練され細部にこだわる職人の技と感性自体が京都らしさの源泉と言える。

長い間、質の高い製品を造り続けてきた背景として、技術の継承と新たな発展を支える流派の存在や、弟子入りなど師匠から技術を伝授されるシステムがある。

宮大工の例をとれば、法隆寺の時代から連綿と継承されてきた技術的蓄積が工法や木割、矩尺を用いた寸法や角度の算出等の技として伝えられている。しかしそれらの直接的技術に留まらず、プロポーションや曲線の優美さなど、その建物固有の条件に合せた感性の分野に付いても師匠の作風を学び、また残されている型板の形状を取りながら数百年に渡る蓄積を学び継承している。

軒の垂木が扇状に開く扇垂木などの加工を見ると、微妙な開き加減を矩尺一本で寸法を出し、垂木の軒先の角度を決め、切り落として行く。組み上げた時の軒面が見事に揃っているのは正に職人芸であるが、話しを聞くと視覚的修正の為に計算に僅かな変化を加えているそうである。このように単なる技術の修得に留まらず、感性の面からも技が工夫され継承されていく。これらの感性を支えていく美意識自体も代々の建

物を発注した主人や、寺であれば檀家の人々の評価や注文によって磨き上げられていく。このようなシステムが宮大工の感性や美意識を高め、師匠から学んだ技術の上に自分流の工夫を加え完成させていく。

同じような例は数寄屋大工にも見られる。茶席の各部の寸法には一定の決まりがあるが、最終的には発注者である旦那や茶人の感性が決定していく。どんな形の材であっても精緻に組み立てる技術と経験、伝承による寸法体系に加え、感性に関わる分野でも棟梁の感性と発注者の感性とがコラボレートし、日本の美の基準の一つとしての建築様式が完成されてきた。

2 大衆化される美の様式

京都の様々な文物には美的評価基準が存在する。通常、美の基準を語る時には特定の作家や作品自体が挙げられる。ところが評価者の名前で美の基準となっている世界がある。

茶道の道具類については「○○好み」として評価した人の名前によって美の基準が示され、弟子達の感性や美意識の醸成に役立たされ、また工芸家自身の製作の基準ともなる。この仕組みは評論家による評価システムと大きく異なる。評論家は第三者として見識と公平さを背景とし当事者ではないが、この場合は評価する人自身がその集団の持つ様式や美意識のリーダーであり、隅々に至るまでの美的統一をコントロールするプロデューサーだからであり、その社会の中で一般化された美の基準を自らが決定する当事者となる。いわば閉鎖社会での評価や価値観の創造を行っているとも言える。

しかしこの評価の対象となる文物が茶道や華道など日本文化の主要な要素となると、単にそのグループに属する人々にとってのみの価値基準というよりは、日本人に一般化された美の基準としての価値を持つようになる。

日常的にもお稽古ごとを通じて美的見識に触れ、美的価値観が埋め込まれ、素養となっていく。

日本の美意識はこのように様々な方法で古くから町衆や庶民の文化の底流となってきたため、今日でも京都の日常生活であちこちから顔を出す。

今日着物を着る人や機会が激減しているが、一方で着物のコーディネートは日本人の美意識を作り上げる上で大きな役割を果たしている。

着物の製造は極めて多くの工程や要素で分業化されており、室町の着物問屋はそれらの多様な要素を組み合わせて発注するプ

ロデューサの役割であり、柄、色彩小物との取り合わせなど様々な組み合わせによる美しさを創出してきた。

一方消費者の側もそのようにして作られた着物を季節、場所、状況に応じ選択する能力が求められ、着物屋さんとの対話の中で、また親から子への常識として伝えられている。良く聞く話であるが、着物を着ていくとお互いが相手の着物をすぐ値踏みするなどといわれる。本音のところもあるであろうが、このような消費者どうしの評価を通じて、問屋もその見識を問われ、消費者自身も「目」を育てることになっていく。

3 能力を最大に引き出す発注者

美の基準を作り上げる者、消費者としてお互いにびのセンスを磨く者に加え、美しい物を作り上げる能力を引き出す役割を果たすパトロンの存在も大きい。

かつてイタリアのメディチ家がミケランジェロを始めとして多くの芸術家のパトロンとなり今日のヨーロッパ文化の基礎を造りあげたように、能力有る者に機会を与えて、かつ優れた物を作るインセンティブを与えて自由に創作させる。これらにより新しい美が創出される可能性を持っている。パトロン自身が優れた創作者から美意識や見識を学んで成長する仕組みの一つでもある。

京都大学教授の高松伸氏の若き日の作品「織陣」や若林広幸氏の西本願寺前「西利」の作品も言わばそのような環境から生まれた作品と聞いている。

4 規格と変化——町並みを構成する町家の美意識の醸成

京都の町並みデザインの主要要素が町家の連なる景観であることは異論がないところである。

町家のデザイン原理と集合システムの特徴は要素の少ないデザイン的骨格にある。一見同じに見えて、細かく見ると違う手法は近代の芸術論、創作論との違いが見られ、自己の創造性を最大の評価基準とする創作論とは相容れないものである。

これは先にも例に引いたように、着物や茶道具のような過去から積み重ねられた様式美の上に構築される新しい美の創出方式と同一線上に有る手法であるからである。

町家のデザインを決める要素は枠組みの規格とディテールの工夫であり、ディテールが限られた意匠の発揮場所となる。

表に見られる構成要素は柱、桁、垂木、一字文字瓦、土台、束石などの構造体であり、蟲子窓、格子窓、出格子、格子の引き戸、入口戸、幕掛け、腰板、漆喰壁、聚楽壁、紅殻塗り、彫り看板等の構成部品である。寸法体系もほぼ一様で、畳、建具の幅、高

さの規格がどの町家であっても同一なため、必然的にこれらの内部の寸法体系が外に表れ、間口が規格化される。

屋根勾配は4寸程度、軒高12尺または14尺～16尺（時代により異なる）とほぼ同じ軒が隣家の屋根に覆いかぶさるように少し高低を付けて連続する。

このように一定の規格の中で発注者と棟梁がそれぞれのセンスや見識を出し合い、ディテールに凝縮して細かな工夫を積み重ねており、単に棟梁のみのデザインではないところに町並みとしての纏まりと変化がバランスよく作られていると言えよう。

町家つくりの過程で棟梁や発注者が暴走しない歯止めとして町内の決めごとも有るが、同時に隣人の評価も大きな要素であり、物づくり都市として美の評価基準を市井の人々が共有することにより町並みがつくられている。

同時に大きな家作を行う素封家は当然のことながら高い見識が求められる。今日でも京都の主要な企業のオーナーが自社ビルを建設するに当たり、建築家に京都の家づくりの作法や作事の精神を守る様求める例も見られる。

京都の代表的ビジネスゾーンである室町御池通角の藻光ビルのアプローチでは、禅宗の寺の作庭で言われる「真・行・草」の精神に基づき素材が選択されている。また東北の隅には魔よけの樹として柳の樹が植えられ、町並みの要素として調和を保って

いる。

町家の復権を目指して活躍している黒竹氏も、新町通りの本社ビルの建設に当たって、氏の見識により鉢町に相応しい町並みがつくられている。

5 皆が目利きとなり美しい町をつくる

町をつくる建物のデザインやその構成が、町に愛着を持ちその町で長く生産活動に携わる人々によってつくられる時には、物づくりや生活の中で共有化された美意識や見識が美しい町並みを作り上げる可能性を持っている。しかし今日のように町が商品化され、企画や建設に携わる人が町を単なる金もうけの道具としてしか見ない経済の仕組みの中では文化的価値を生み出すような町をつくることは不可能である。各種の規制的制度により一定の歯止めは可能であろうが良い物をつくり出す原動力とはなり得ない。

京都の文化的価値を作り上げてきた市民は、今日でも日常生活の中で他の都市住民に比較すれば文化的な素養を育てられる環境に有り、また日々そのような行動に身を置かざるを得ない状況にある。

町の商品化をさけ、町づくりの主役を町衆に取り戻し、日頃の活動によって育まれた美しいものを評価する「目利き」としてまちづくりに向けられる時、美しい景観を継承する可能性は高く、またその可能性は残されていると言えよう。

京都は1200年の歴史都市であり、その中で伝統産業は自然や風土、歴史などのハード的条件と、生活の中の知恵や工夫などのソフト的な作業が融合して、今日に継承されてきました。しかし、様々な伝統産業を受け継いできた京都ですが、今日では産業基盤が大きく変化し、従来までの伝統産業をはじめとするモノづくりというものをベースにした社会が揺らぎ始めてきました。そんな社会的背景とともに、戦後より京都の町並み景観も変化してきました。

京都の町並みに欠かせないものである京町家が文化住宅に姿を変え、また次々と高層マンションに姿を変えていく中で、失ってしまったものがたくさんあります。京町家での生活には季節や時期に応じて様々な作法がありました。そして、自然と共生するために様々な工夫が生まれました。そして生活や歳時記のなかで、必要なあらゆる道具を創作したり、使用したりすることを経験し、産業が生まれ、発達し、継承され

てきた。これが文化というものではないでしょうか。ところが現代では生活を取り巻く環境が大きく変化してしまい、伝統的な古い道具を使う経験をするという環境がなくなっているが故に、使うことは元より、存在すら知らないという世代もあるように思います。

伝統産業をもっと普及させることを考えるのであれば、その使い方を知らない世代にも教えてあげることが必要だと思います。若しくは、もっと幼い頃から文化というカリキュラムを学習の中に取り入れ、自分の故郷についてもっと興味や愛着を持って接することができるような文化教育のようなものが必要ではないかと思います。

それと同時に、伝統的なものを深く知らしめるためには、環境というものの影響が大きいと思います。京都は世界歴史遺産の宝庫でもあり、歴史的建築物が多く残されています。その周辺の環境を整備することによって多くの美観がゾーンとして再生できます。また京都は未来に向かって様々な

特集 11～コラム・3

京都の町並みと感性産業

黒竹 節人
KUROTAKE SADATO

株式会社

役割を担っていると考えられます。歴史的・日本の伝統的な産業や文化・町並み・原風景など、これら先人たちの遺産を継承していくことは課題であり、現代生活の営みを伴いながら取り組んでいかなければならないことだと思います。生活のための都市機能と歴史都市としての魅力を両立し、日本の本当に伝統的な文化の良さを未来に伝えるためには、いろんな修正や変化はあるにしても、やはり軸としてしっかりとしたものが必要だと思います。

これまで培い、ストックしてきた伝統産

業と豊かな文化資源を融合させ、新たな感性を注ぎ込むことによって新技術・新製品や新市場の開発など、新たな京都産業の発展につなげることができないだろうか。そして産業と環境が一体となり、街区全体ひいては京都全体の活性化へつながっていくだろうと思います。

社会構造の変化を踏まえ、この空間の文化的なあり方を反映させることができれば京都本来の魅力を取り戻し、繁栄していくことだろうと思います。

特集

12

「新光悦村」構想について

畠村 博行

HATAMURA HIROYUKI

京都府商工部商工振興課

緑深い山々に囲まれ、ひっそりと佇む閑静の里・京都洛北の鷹峰

——今を遡ること4百余年、江戸時代初期の芸術家本阿弥光悦が、徳川家康から拝領したこの地に当節一流の職人を引き連れて移り住み、後に「光悦村」と呼ばれる異業種集団の芸術村が誕生しました。

この光悦村では、書画や陶芸、漆芸など、様々な分野の工匠らが生活をともにし、日常的な交流が行われる中で、光悦という稀代の天才のコーディネイトのもとに、次々と新しい技や表現が生み出され、京都のみならず、わが国の芸術・工芸の発展に重要な役割を果たしたといわれています。

「新光悦村」構想は、この光悦村のコンセプトを現代という時代に置き直し、21世紀の京都産業の発展につなげようとする一大プロジェクトです。

平成3年に京都府が構想を打ち出し、その後、バブルの崩壊と未曾有の不況の中にも関わらず、民間企業を中心に活動を開始した「新光悦村研究会」の皆さん方が地道な研究を続けられ、構想から8年の歳月を経て、今ここに新光悦村構想が現実のものとして動き出しました。

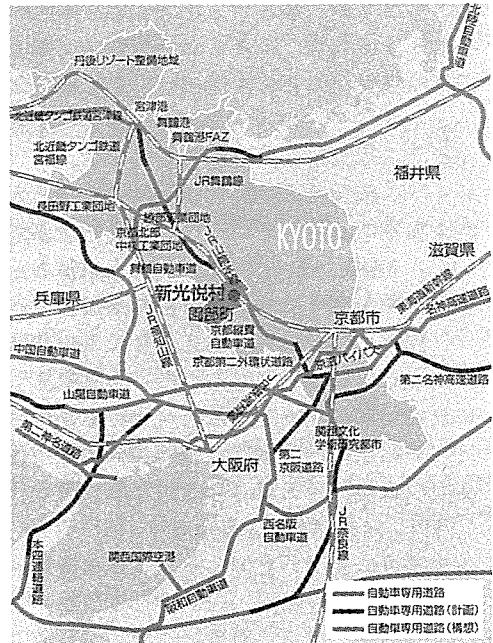
それでは以下に、このプロジェクトの概要について御説明したいと思います。

1 構想の理念

「ものづくりの伝統」

——コンパクト化技術、細部にまでこだわる精緻さの極み、完成度の高さなど、世界をリードするわが国のもつくり産業の発展の基底には、例えば「幕内弁当」や「盆栽」、「茶室」などに代表されるように、ひとつ一つのものに魂があり、小宇宙があると考える日本人の文化や価値観が、色濃く反映されているといわれます。

大量生産、大量消費を旨とした20世紀の「産業経済」の時代から、個性化を軸とする21世紀の「文化経済」の時代を迎えるに当たり、このような日本人独自のこだ



新光悦村位置図

わりのものづくり文化を再評価し、産業と文化との関係を改めて考え直してみることは、大変重要で意義のあることではないかと思われます。

日本固有の文化やライフスタイルが形となつたといつても過言ではない伝統産業と、日本人の技術の粋が極められた先端産業、そしてその両方が共存する千年の都・京都

——この恵まれた条件を最大限に活かし、文化とテクノロジーの新しい関係を構築し、21世紀の新たな産業の創出に挑戦する拠点づくりをめざすのが、この新光悦村プロジェクトです。

ここでは、伝統工芸とハイテク産業の各分野から、企業家や研究者、作家や職人などが集まり、異業種や異能種交流、あるいは世界中から本物のものづくりと出会うために訪れる観光客との交流を通じて、21世紀に向けての新しい生活文化産業が芽生え、伝統産業の側は、新しい素材やテクノロジーとの交流によって、市場・活用領域の創造的開発に、また、ハイテク産業の側

は伝統産業との交流によって、製品のハイタッチ化や文化性の付加価値の添加に、大きな成果が得られることとなるでしょう。

2 事業概要

新光悦村は、現代的な表現をすれば“工業団地”ということになりますが、既存の工業団地のイメージとはおよそ異なる形で整備を行っていきます。

事業場所は京都府中部の園部町で、京都縦貫自動車道園部インターチェンジの隣接地の約23ヘクタール、雑木林や池などの自然がそのまま残る小高い丘は、まさに光悦村を現代に再現するに相応しい環境と立地条件を備えています。

この園部町では、豊かな自然に恵まれた心穏う環境とともに、京都伝統工芸専門校や京都国際建築技術専門学校、京都医療技術短期大学のほか、建設中の佛教大学園部キャンパスなど、教育や人材育成を最も重視するまちの基本方針のもとで、国際学園都市の整備が着々と進められ、さらに、町内を結ぶCATVネットワークや園部マルチメディアセンター、関西文化学術研究都市と結ぶB-ISDN等の先進的な情報インフラ整備が進むなど、新しい時代を切り開く様々なチャレンジが積極的に行われており、新光悦村づくりを進めていく上でふさわしい環境・条件を備えています。

この約23ヘクタールの土地に新光悦村の整備を行う訳ですが、現地での造成は、京都府（企業局）が、これまで長田野や綾部など府営工業団地の整備で培ってきたあらゆるノウハウに、環境や観光に配慮した21世紀の新しい開発理念を取り入れて、総力を挙げて進めることにしています。

こうした観点から、造成形態については、自然の地形やため池、雑木林などを活用した「環境共生型」とし、村の中には、生産施設や研究所、工房などだけでなく、マー

ケットプレースや見学・体験工房・私設ギャラリー、あるいはセンター施設などの配置も考慮するなど、世界ではじめての産業・観光テーマパークのモデルとなるような、まったく新しいものをつくり出していきたいと考えています。

3 推進体制

さて、新光悦村構想を円滑に推進し、理想を実現するためには、事業主体の京都府と地元の園部町、そして立地する企業などの皆さんとの三位一体となった密接な連携が欠かせません。

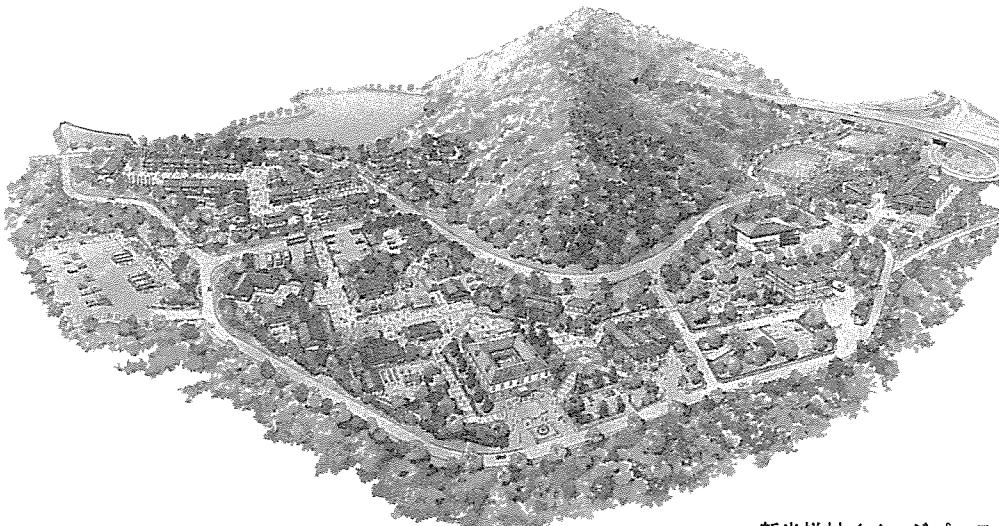
そのため、本年6月に、土地利用や共同利用施設、管理運営など新光悦村の整備から運営に関わる様々な事柄について意見交換していただくための組織として、「新光悦村推進協議会」が発足しました。

この協議会には、進出を検討されている伝統産業やハイテク産業の企業さんや、工芸作家、芸術家など、これまでに40を超える皆さんに参画をいただいており、整備予定地の視察やテーマ別の検討会などを実施しながら、新光悦村を世界的な産業・観光テーマパークに創り上げていくために、日々精力的な取組が行われているところです。

なお、この協議会では、実際に立地されるかどうかは別にして、現時点での意向や可能性があれば誰でも参加していただけるように常に門戸を開いておりますので、興味や関心がおありの方があれば、まず御一報いただければ幸いです。

4 おわりに

新光悦村は、日本文化の粋を凝縮した伝統産業と、次代のわが国の経済をリードするハイテク産業が交叉する21世紀の新しい産業文化空間であり、日本人の価値観を内在した新しい生活文化をクリエイトし、世界に向けて発信する京都ならではの、ま



新光悦村イメージパース

た、京都にしかできない夢のあるプロジェクトです。

今から4百年前、光悦村で営まれた数々の新しい取組が、日本の芸術や工芸を大きく進歩させたように、21世紀初頭にこの新光悦村で行われるであろう研究開発から生産、流通、販売に至るまでの新たな試み

や挑戦が、必ずや京都の、ひいてはわが国産業の新たな飛躍に結びつくことを確信して、今後とも精一杯事業の推進を図っていきたいと考えています。

最後に、各界の皆様の「新光悦村」構想への御参画を、心からお待ちしています。

特集 13~サブテーマ

まつりという景観

臼井 風山

USUI FUZAN

絲管打座 邦楽演奏団体

京都の景観の中で祭りは重要な要素をなしている、ということは洛中洛外図を例にひかずとも、観光目的として祭りが大きな位置を占めていることからも明らかだろう。

観光の対象になる祭りは、熱狂的なものが多い。青森のねぶたをはじめとして、岸和田のだんじりにしても阿波踊りにしても博多祇園山笠にしても、跳ねたり叫んだりという生身の人間の身体行為が、まつりというハレの異空間を創り出し、観光客を熱狂させる。土佐のよさこい祭り、それに感応した学生の手によって始められた北海道のよさこいソーラン、さらにその成功に触発されていくつかの自治体では、名こそ違うが熱狂した観客を取り込むことを意図した類似イベントを始めている。これが最近の祭りのトレンドなのだ。

一方、京都の祭りはしづしづととり行われる。例えば京都三大祭といわれる葵祭、祇園祭、それに時代祭。祇園祭はさまざまな芸能が付帯するが、葵祭りや時代祭は何の演技も伴わない、全くの行列だ。一日に数万人もの観光客を集める祭りとしては、これは異例のことだろう。身体的演技を伴わないまま多くの観光客を集める祭りというと、札幌雪祭りや仙台の七夕祭りなど思い浮かぶが、これらの雪像にしても七夕飾りにしても、人の目の鑑賞にたえるべく創意工夫を凝らしたうえで展示してあるものだ。

それなのに、なぜ行列を眺めるためだけに数万人もの観光客が集まるのだろうか。これが文化の中心性というものの重複する歴史の重みのなせるわざなのか？

一体観光客は京都の祭りに何を求めているのだろう。

かつて、機会があれば京都に住み作曲の仕事に専念したいと熱望した音楽家がいた。盲目の箏曲家、宮城道雄である。不慮の事故のためについにその望みは果たされなかつたのだが、彼が京都にこだわったのは、単に箏曲の開祖八橋檢校の墓があるからではなく、この地に王朝文化の風情が残存するが故であった。そのような地に暮らすことによって創作活動にインスピレーションを

得ようとしたわけで、宮城道雄にとって京都とは、王朝文化を生み出した精神が町のそこここに景観として存在している、そのような場所であったわけだ。

さて、この盲目の音楽家は京都の地に何を見ようとしたのだろうか。今となっては彼の心に映った情景を想像するだけだが、寺院を訪れては、伽藍の巨大さよりも境内の隅々にまで広がる静寂であろうし、町を訪れては、町並みの意匠ではなく格子戸の開け閉ての音であったり人々の話し声であつたりしただろう。つまりは、この地に積み重ねられた文化に惹かれていたのだと思う。

この宮城道雄が京都という町に求めたものと、現代の観光客が京都のまつりに求めるものは同じものではないか。

かつての京都には文化的景観が、確かにあつただろう。では、現代の京都に京都らしい景観がどれほどのかっているだろうか。確かに、一部の風致地区は景観保存されているが、それら点在するポイントを、観光客はバスやタクシーで矢継ぎ早に巡回する。その移動の途中には、凡庸な地方都市の町並みをいやというほど見せつけられることになる。

観光客はもう知っているのだ、はんなりした風情は絵はがきの中にしかないことを。

個別の建築物に歴史を認めることがきても、一部分の町並みに歴史的景観を見ることができても、それらを総合した都市景観の中に歴史文化が見いだしにくくなっているのが今の京都だ。だから祭りが求められる。

そのように見ると、祭りというものは都市に異空間の窓を開ける装置だとも言えよう。京都を囲む山々に、10分間隔で反時計回りに次々と点火していく五山の送り火などはその最たるものだ。その瞬間だけ京都の町全体をあの世に接続して、先祖を送り出すのだから。

また地蔵盆という行事がある。これは町内よりさらに小さな隣保といった地域単位でとり行われる。町の辻々に小さなお地蔵様が祀られていて、それぞれの地域で地蔵盆が行われるが、ほぼ同時期にあらちこちらで同時多発的に催されることになる。こ

の情景を俯瞰してみたら、碁盤の目の町並みをすっぽりと覆う巨大な曼陀羅が見えるのではないかと思える。

結局、観光客は京都の祭りに熱狂を求めるのではなく、その背後に歴史をみているのだ。いわば、まつりが歴史的景観を補完しているわけだ。ふだんは凡庸な地方都市の景観の中に埋没している寺社だが、年に

一度だけ祭礼の時には周囲の景観の中心として浮上してくる。非日常的な空間が突如として現れるわけだ。その時には、寺社の由緒、祭礼の来歴のただしさが喧伝され、いかに退屈な行事であろうとも、観光客はその由緒来歴にひれ伏す。そのような祭りに遭遇することで旅の充実感を得るのだ。

■第9期全国ブロック幹事会報告

伊藤 洋
ITOH YO
代表幹事
㈲CAU・プランニング

ブロック活動に変化のきざし？ 10周年に向けて、特別委員会がスタート！

■今年度、第9期全国ブロック幹事会は、中部ブロックに依頼して開催された。全体スケジュールは、11月5日（金）に、デザインフォーラム「都市環境デザインにおけるヴァナキュラーの展開について」及び懇親会、6日（土）に全国ブロック幹事会（午前）及び2コースに分かれて見学会（昼～午後）であった。

■5日のデザインフォーラムは、パネラー、発言者の間で『ヴァナキュラー』という言葉の使い方に相違が見られ、「『ヴァナキュラー』は相対概念である」との指摘もされて、用法の幅と深さが感じられる結果となつた。6日の午後に行われた2コースでの見学会で実地の検証にゆだねられたこととなつたが、今後これをふまえて中部ブロックでのデザインガイドブック作成の中で具体的に整理していくことが期待される。

■全国ブロック幹事会は6日9：30～11：00、名古屋市・名古屋都市センター会議室において開催された。出席者19名に、オブザーバー4名を加えて各ブロック、委員会、代表幹事会の報告があった。活動報告では、昨年の会議で話題となつたブロック活動の方法論を受けて幾つかの試みが進められていることが明らかになつた。なお各ブロック

とも全会員の参加や会員が少なく、活動の空白地域を少なくすることなどの課題を残しているが、少しずつ地道な努力が行われている様子が報告された。

四国の瀬戸内しまなみ海道フォーラム、関西の参加型都市環境デザインをさぐる、ブラジルセミナー、中部のヴァナキュラーの展開をテーマとしたフォーラム、関東の運営委員に新しい人材を見つける、東北のゼロエミッションセミナーなどが行われている。

委員会活動では、事業委員会からデザインガイドブックの「造景」への掲載が難航しており、編集し直しのためフォーマットの見直し、調整を進めることができた。国際委員会からは、インターネットを次期総会までに具体化すること、ホームページ維持管理のため別にチームを編成することが提案された。

■代表幹事会からは、10周年事業のアイデアを練る特別委員会について、コアメンバーを南條道昌氏、中井川正道氏に委嘱していること、委員には各ブロックからの参加を考慮していることを報告した。また10周年のメインとなるセレモニーを10期末に行うとして、時期をいつにするか協議された。11期総会と兼ねて関西ブロックで開催する案を含めて検討したが、総会と兼ねる場合には、モニターメッセの開催できる都市を考慮することも指摘された。具体案については、さらに特別委員会、代表幹事会で検討・調整することとされた。

■10周年のセレモニーにより多くの会員が参加することを期待すると、全国ブロック幹事会、10周年、定例総会と集まる機会の多くすることは好ましくない、との意見があり、次期ブロック幹事会は開催を保留することとした。早い機会に特別委員会、代表幹事会及び関係ブロックで調整するとともに、開催する場合には関東ブロックに依頼することとなった。



名古屋都市センターで開催された全国ブロック幹事会の様子

■事業委員会報告

中野 恒明

NAKANO TSUNEAKI

事業委員長

㈱アブル総合計画事務所

○都市環境デザインガイドの雑誌「造景」の連載遅延の報告とお詫び

JUDIニュース48号でお知らせしました、秋よりの連載の話が一旦白紙となったことを報告します。

各ブロックの責任編集体制で、関西ブロックを皮切りに、北海道ブロック、四国ブロックと続く予定で、関西の「奈良」「京都」「武庫」の3地区について「造景」側に原稿を提出しておりましたが、内容の掘り下げ方にバラツキがあるなど、雑誌の連載になじまないと回答を受け、全体の見直しを余儀なくされました。

そのため事業委員会としては2つの代案を用意し、造景側との再調整を行っております。

1) 当初のガイドブック調に戻し、連載方式とする。この場合、JUDI都市環境デザ

インガイドブック担当事務局でフォーマットを作成し、連載に馴染むように再度調整する。

2) 各ブロック毎にまとめて掲載する(特集または別冊方式)。これまで通りある程度ブロック毎の自主性を尊重する。

いずれにしても編集作業が進行中の北海道ブロック、四国ブロックの内容が出そろった段階で、再度「造景」編集部との協議を予定しています。

今後の方向づけについては12月2日の編集委員会にて改めて協議し、各ブロック担当者に報告しました。

雑誌掲載を期待されていた方々、編集にご尽力下さった方々に深くお詫びするとともに、今後の編集委員会の更なる努力の必要性を痛感いたしました。

■ブロック例会レポート

■関西ブロック

長谷川 弘直

HASEGAWA HIRONAO

関西ブロック幹事

㈱都市環境計画研究所

第8回都市環境デザインフォーラム・関西は1999年10月6日(土)神戸市立こうべまちづくり会館で開催され、約170名の参加があつた。参加型・都市環境デザインを探るー神戸からのまちづくりをテーマとして全員が参加討論する活力ある状況と場のフォーラムを目指した。阪神・淡路大震災の年の95年11月17日に第4回フォーラムを神戸で行い、「まちとアイデンティティー震災に見る市民参加ー都市環境デザインの連続性」をテーマに市民、住民と行政、専門家の関わりについて議論された。あれから4年、再び場所を神戸に参加型を実践し、そこから何が見えてきたのか、ワークショップを通して、神戸・阪神間では様々に多くのまちづくりが展開されてきたが、そのプロセスの中での得た評価、課題の検承について改めて報告、議論を試みた。会場は3つのセクションで部屋を2階、3階、6階とわけ、好きなテーマを自由に参加、発言する方法で1人がいくつものテーマに部分参加できることで講評であった。合わせて第2回JUDIフォトコンテストの結果発表と表彰式が行われた。

最優秀今森賞：森重 和久

優秀賞：田端 修

西 斗志雄

写真展はフォーラム会場と後日INAXギャラリーで展示された。

関西ブロックはフォーラムに向けて常に中身ある資料として「フォーラム小冊子」をつくる<学芸出版社の前田さんの力が大きい・感謝>今回は全国のJUDI会員にお願いしてワークショップのまちづくりの事例を60数点掲載している。貴重な資料として仕事にも役に立つ事と考え、全会員に配布することに致しました。

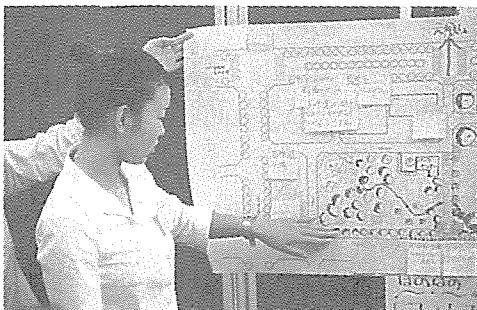
99年11月5日(金)・6日(土)に都市環境デザインフォーラム in 名古屋と全国幹事会関東ブロックから伊藤 洋さん、関西ブロックから長谷川 弘直がパネラーとして参画した。全国幹事会ではJUDI設立10周年事業計画について2001年、横浜、関西等が提案、討議された。

中部ブロック会員の皆さん、お忙しい中、本当にご苦労様でした。

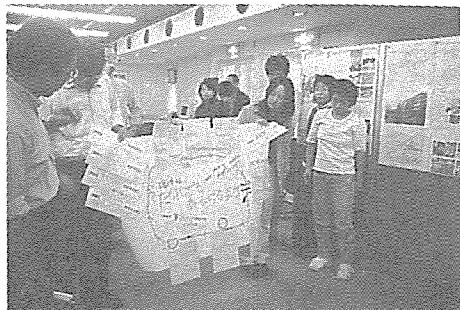
99年12月18日(土)日本電気俱楽部で今年度総会が行われます。総会からセミナーそして懇親会で2000年を向かえます。



3セクションのまとめと報告をする左から松久氏、田端氏、柿原氏



公園づくりのワークショップ風景
自然系案と施設系案の2つのグループが提案



ワークショップの成果をフロアの参加者に提案する

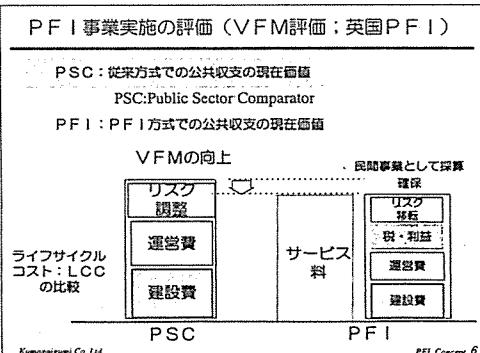
■関東ブロック

作山 康
SAKUYAMA YASUSHI
関東ブロック幹事

株都市環境研究所

10月セミナーは、「日本におけるPFIの可能性と展望」－民間から考えるPFI導入の効果について－と題して、㈱熊谷組営業総括本部PFIプロジェクト部部長の大島邦彦氏を招いて講演とディスカッションを行い、20数名の参加者があった。

PFI推進法が9月24日に施行された（但し、基本方針は11年度中、その後各自治体が実施方針＝公募要綱等を策定）こともあり、自治体や銀行、ゼネコンやディベロッパーなどがそれぞれ研究会等を実施しているが、熊谷組ではイギリス、バンコク、香港、豪州などでのBOT事業の海外実績を活かし、さらに今年4月には英国最大手コンサルティング会社のWSアトキンス社とPFI関連分野の技術提携し、日本版PFIのあり方をいち早く研究し取り組んでいる。今回は、①日本版PFIのコンセプトと概要、②PFI法、③国・自治体、民間等におけるPFI検討動向、④PFIの国内・海外事例、等について説明を受けた。その概要は以下の通り。

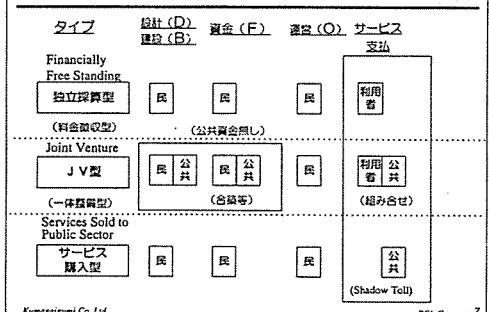


国・自治体が財源難・起債制限の時代になり、かつ公共サービスの向上も求められる中で、PFI (Private Finance Initiative)は、コストの低減又はサービス・質的向上のいずれかが可能となり、特にリスクを民間へ分担でき、かつ通常は膨大に初期投資が必要であるが平準化されて財政負担が軽減されるなど、公共サイドの効果は大きい。民間も工事受難の時代で、長期的な契約となり経営の安定につながる効果が期待される一方、移転されたリスクに対する保険加入や高い金利(自治体の起債等に対して)の資金調達、税金、そして民間故の利益など、公共事業にはなかった新たな負担を上乗せした上で、技術、競争、創意工夫のなかで総事業費を低減できる企業だけがPFIを活用できる。契約書により規定するため、数十センチの契約書(画面を入れると数Mにも)にもなることもあり、弁護士、会計士等も必要となろうし、これらのことから、100億円以上の事業でないと採算が合わないと想定されるが、大規模工事が細分化され発注されやすいうことから、5～

10億円程度の事業が多く発注されやすいと考えると、例えば英國のように10個位のパッケージでPFIにすることが考えられる。リスクが過大なものはPFIに適さないことは当然で、民間への可能な範囲でのリスク移転により、いかに最適・最大のVFM(バリュー・フォー・マネー、マネーは税金)を追求するかである。日本のPFIは、90%くらい英國方式で考えられており、事業タイプとしては①「独立採算型」(英國では有料道路や鉄道など)、②官民が連携して事業を推進し、運営や経営を民間が主導する

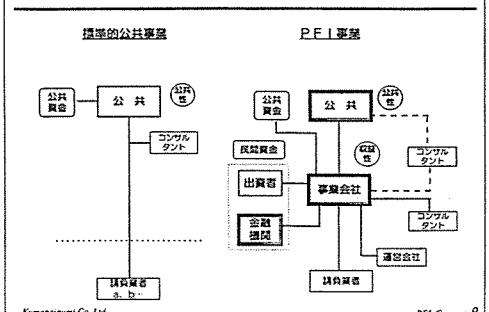
「JV型」(有料道路やLRT、都市開発など)、③サービス購入型(一般道路や刑務所、病院、庁舎、学校・寮、図書館、博物館、情報システム、保険記録システムなど)などが考えられ、英國では③サービス購入型が多い。

PFI事業のタイプ：英國PFI



事業の基本スキームは、発注者の「公共」、そして事業主体の「事業会社(特別目的会社、当面はメーカー、商社、建設会社など)」に加え、出資者や金融機関による「プロジェクトファイナンス」、公共と民間の中間的立場で設計士、かつ施工や設計をチェックするインディペンデントエンジニアとしての「コンサルタント(弁護士、会計士、銀行のプロなどファイナシアル・パートナー、ディベロッパー、総研等を含む)」等から構成される。

PFI事業の構成(基本スキーム)



自治体PFI事業の場合、今後実施方針策定後は、公募等(随意契約もある)により事業者が選定されるが、英國では優先交渉権1位、2位・・・として登録しておき、1位の事業者と話が合わない場合は2位の事業者と交渉する方式をとっている所もある。但し、この方式だと契約まで10数ヶ月もか



セミナーの講演者大島邦彦氏

かる欠点がある。日本では事前資格審査=PQを行なう期間をかけない方法が選ばれると思われる。

PFI推進法で一つポイントなのは、国有地・国有財産を無償又は廉価で使用できることである。各省庁がPFI活用の可能性を調査しているが、建設省においては、公園や有料道路、環状2号の街路事業や公営住宅などが検討されている。現在自治体で実施段階の東京都金町浄水常用発電や、埼玉県SKIPシティ(川口市)、千葉県広域廃棄物処理(君津市)、準備段階の埼玉県テクノパークセンター(熊谷市)、藤沢市防災センター、三重県交流拠点事業などがあり、このほか実施検討プロジェクトも多数紹介された。

今後の可能性については、病院については可能性があるが医療法の調整が難しいことと営利目的にしにくい課題があること、駐車場は立駐は可能だが、地下駐は採算が合わないこと、リニューアル事業は可能性があり、公営住宅は借り上げがよいか買い取りがよいか何とも言えないこと、図書館などは民間の場合に時間延長できる等のサービス向上や他の施設との連携(例えばホテル、本屋、喫茶店など)も考えられる。

このほか海外事例も紹介され、セミナー終了後の懇親会では、参加者の交流と共に、個別に大島氏が質問に答えてくれるなど、実りあるセミナーであった。

1. 新会員の紹介

1999年9月1日～10月31日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

10月31日現在の会員数は、526名です。

氏名	勤務先
澤木 昌典	大阪大学大学院工学研究科
片山 基	(株)環境デザイン
釘宮 裕二	(株)クギン
吉羽 逸郎	(株)アイ・エフ建築設計研究所
下村 泰史	都市基盤整備公団関西支社
葛西紀巳子	(有)色彩環境計画室
溝淵 博彦	高知県立高知工業高校
土井 勉	(財)千里国際情報事業財團

2. 退会者(1999年9月～10月)

厚地正信、大橋成夫、高瀬静昭、千葉純、津田信次、西田勝彦、平井亘、宮野裕子(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
壱岐 伸敏	壱岐デザイン企画室 〒803-0817 北九州市小倉北区田町 5-20-203 Tel&Fax. 093-562-0242
杵村優一郎	杵村建築設計事務所 〒683-0043 米子市末広町144 Tel. 0859-32-4183 Fax 0859-32-7215
下村 彰男	東京大学大学院農学生命科学研究科 Fax. 03-5841-7556
高橋志保彦	(株)高橋志保彦建築都市デザイン事務所
中島 秋平	(有)中島造景事務所 〒761-8075 高松市多肥下町1203-3 Tel. 087-864-5525 Fax 087-864-5526
中山 義光	日広建設(株) 〒228-0802 相模原市上鶴間3498 Tel. 0427-42-3956 Fax 0427-42-7403

今回の特集はまた「京都」である。編集担当者である私が京都にいるせいか、編集会議でいつも11月号は京都絡みのことになってしまふ。だがこれはJUDI会員にとっても京都が興味のある都市だからだろう。確かに京都は歴史的にみても都として他の都市の先を走ってきた。それが東京に替わられることによって、また他の都市に先んじて都市の斜陽化が進んできている。

そのような中で21世紀に向けた明るい新たな胎動が感じられる部分を出来るだけ採り上げようとしたのが今回の特集の主旨である。地場産業の街・京都が抱える都市環境の問題は歴史都市だけでなく、様々な他の都市にも共通の問題であろうし、そこでいかなる解決を見いだすことが出来るのか。

そんな中で最近面白い動きが伝えられる西陣を特に中心にすることにした。西陣は京都の中でも象徴的に問題が顕在化している地場産業の街で、京都の縮図のような街である。その街で「ネットワーク西陣」は興味深い動きをしている。代表の佐野氏は町家に住みたいとやつくる人は外国人の

感覚に近いという。彼らは何も町家を保存しようと考えているのではなく、町家がかっこいいから住むのだという。だから補修も元の形に戻すのに近いようだ。そしてどのように改装された家を見て、地元の人達は町家本来の美しさや生活に改めて気付くという。既に自分の家を改装してしまった人は、元のままにしておけばよかったと言う人までいるという。そんな話を聞いて、人が街を変えていくだけではなく、街に合わせて人が変わっていくこともあるのだということを改めて認識させられた今回の編集だった。(清水泰博)

広報・出版委員会

澤木 俊尚	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
作山 康	

事務局より

編集後記